

特集

# つながり放題!?

—ネットワークコミュニケーション時代を生きる—

連載

When I was young 「ひとつの法典を求めて、海を渡る」—総合政策学部助教授 奥田敦

シリーズ対談 岐路における意思決定—慶應義塾大学経済学部教授 吉野直行 × 総合政策学部4年 鈴木康之

【新連載】 時をこえて「人と結びついて育まれてきた自然」—環境情報学部教授 石川幹子

【新連載】 もしもし、こちら看護医療学部です! 「チームをまとめるコツ」—看護医療学部助教授 増田真也

【新連載】 SFCのこれからを考える「SFCに物申す!」—総合政策学部専任講師 廣瀬陽子



特集

- 04 つながり放題!? —ネットワークコミュニケーション時代を生きる—
- 
- 06 あたらしいコミュニケーションのかたち 「ネコミゲー」の壮大な実験
- 
- 08 あたらしいコミュニケーションのかたち キャンパス環境におけるweblogの活用方法
- 
- 10 進化する授業
- 
- 11 SNSの先輩に聞こう! 「友達100人できるかな?」
- 
- 14 古きよき時代の物語は、終わった。  
寄稿一環境情報学部教授 熊坂賢次
- 
- 16 「自由なコミュニケーションで自信を持つ」  
村井純教授 「ネットワークコミュニケーション」を語る
- 
- 18 「対人コミュニケーションにはかなわない」  
濱田庸子助教授 「ネットワークコミュニケーション」を語る
- 
- 20 コミュニケーションは、いつでもリアル  
寄稿一環境情報学部助教授 加藤文俊
- 

連載

- 02 **新** 時をこえて 第1回  
人と結びついて育まれてきた自然  
環境情報学部教授 石川幹子
- 
- 22 When I was young 第12回  
ひとつの法典を求めて、海を渡る  
総合政策学部助教授 奥田敦
- 
- 24 Co-net 第11回  
デジタルメディアで未来のメディアを切り開く  
株式会社電通 第6営業局勤務 落田淳さん
- 
- 26 キャンパスへ帰ろう 第9回  
みなさん、SFC三田会は、みなさんの三田会ですよ!  
SFC三田会代表幹事 橋本岳さん
- 
- 28 異国の風 第8回  
タイ王国 新たな看護医療との遭遇  
看護医療学部 国際協力研究会「PEACE」
- 
- 30 シリーズ対談 第5回  
岐路における意思決定  
慶應義塾大学経済学部教授 吉野直行 × 総合政策学部4年 鈴木康之
- 
- 34 **新** もしもし、こちら看護医療学部です! 第1回  
チームをまとめるコツ  
看護医療学部助教授 増田真也
- 
- 36 **新** SFCのこれからを考える 第1回  
SFCに物申す!  
総合政策学部専任講師 廣瀬陽子
- 
- 38 編集後記
- 
- 39 付録 make your campus no.12  
ε (エプシロン) 館



湘南藤沢キャンパス(以後SFC)には、四季の移ろいを鏡のように映し出す自然環境が残されています。早春の雑木林の芽生え、大地からすくすくと伸びるモウソウチク、一際、高くそびえ、はらはらと白い花を落下させるのはニセアカシアです。キャンパス全体が深い緑に包まれる五月、鴨池の林縁で、白雲のように優しい花を咲かせるのはミズキの大木。テアトロンの斜面林には、エゴノキが垂々の花をつけ、ハコネウツギが咲く頃には、トンボの王国となります。

このようなSFCの自然は、人と結びついて育まれてきた自然で、里山とよばれています。皆さんは、慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部の前にある榎(エノキ)の大木をご覧になったことがある

でしょうか。おそらく、SFCで一番古い木で、樹齢は100年を超えています。見上げるような大木ですが、不思議なことに13本もの幹が根元より、立ち上がっています。このような樹形を、「株立ち」といいます。榎の木は、いわゆる雑木的一种です。昔、雑木は燃料として使われていたので、燃えやすい大きな枝を切り取るために、根本を切り、萌芽更新をする方法が広く行なわれていました。榎の大木の樹形は、人々の暮らしと自然の関係を、私たちに教えてくれる証人なのです。

このような視点からSFCの自然をみていきますと、森は、均一ではなく、地域の歴史を映し出していることがわかります。SFCができる前、この地は、谷戸とよばれる細い谷と台地からなる

農村でした。鴨池はかつての水田で、生協の裏の社寺林は、谷戸頭の鎮守の森でした。鴨池に隣接する森は、水田と台地の間の斜面林で、SFCがつくられる時に保存されたため、往時の面影を残しています。桜の老木、クヌギ、コナラにまじり、現在は、シラカシの常緑樹が勢いを増しており、落葉樹と広葉樹の混交林に移行しつつあります。

SFCが建設されるとき、森づくりの実験が行なわれました。その森が、SFCの周囲をぐるりと取り巻いている常緑広葉樹の森です。スタジイ、シラカシ、アカガシ、アラカシなどの幼樹が、50cmという間隔で、ぎっしりと植栽されました。10年を経た今、森は成長してきましたが、過密林を改善するために、間伐が計画的に進められています。放

置ではなく、適切なコントロールをすることで、人工の森も自然の森へと近づいています。

長い農耕社会がつくりだしてきた里山の自然が、いまだに豊かに残っているのが、看護医療学部を取り囲む健康の森です。ここには、絶滅危惧種であるオオタカが生息しており、過去、8年以上にわたり、毎年雛がかえっています。キャンパスの上を悠々と飛翔するオオタカを、ご覧になった皆さんも多いことでしょう。

森は、生命の泉であり、私たちの心を豊かにしてくれます。時をこえて継承されてきた自然、私たちのキャンパスのかけがえのない財産です。

鴨池に面する斜面林



看護医療学部を取り囲む里山



研究棟裏側の実験林(間伐前)

研究棟裏側の実験林(間伐後)

## 06

あたらしいコミュニケーションのかたち  
「ネコミゲー」の壮大な実験

## 08

あたらしいコミュニケーションのかたち  
キャンパス環境におけるweblogの活用方法

## 10

進化する授業

## 11

SNSの先輩に聞こう！  
「友達100人できるかな？」

## 14

古きよき時代の物語は、終わった。  
寄稿—環境情報学部教授 熊坂賢次

## 16

「自由なコミュニケーションで自信を持つ」  
村井純教授「ネットワークコミュニケーション」を語る

## 18

「対人コミュニケーションにはかなわない」  
濱田庸子助教授「ネットワークコミュニケーション」を語る

## 20

コミュニケーションは、いつでもリアル  
寄稿—環境情報学部助教授 加藤文俊



# つながりながら放電!?

— ネットワークコミュニケーション時代を生きる —

いつでも・どこでも・だれとでもコミュニケーションできる時代。情報技術の発達はその手段を多様化させたのは紛れもない事実であるが、それは安全で便利な“魔法”ではない。

本特集では、直接顔を合わせることのないネットワークコミュニケーションが孕む危険性を明確にすると同時に、いかにそれを活用し楽しんで生きるかを考える。

現実のwinと  
ネット上のwin

ファイル(F) 編集(E) 表示(V)  
操作(A) ヘルプ(H)

宛先 :

司会 の発言 :  
winさんは昨年の履修者のなかでも、特に活発な動きをされてるということで有名だったそうですw

win の発言 :  
掲示板での活動に加えて、『ネコリコン』(毎週発行されていたニュースペーパー)があって、それに私の暴走が伝えられたんです。当初予想していたネットワーク上での自分像と、皆に期待されてきた像との差が、だんだん快感になっていったというのはあります(苦笑)

工場長 の発言 :  
わたしちもwinに対するイメージは最初と最後じゃ相当違いますよ。

司会 の発言 :  
運営側から見ても、面白いアクターでした?

RUSH の発言 :  
注目していましたね。

工場長 の発言 :  
匿名の世界でたくさん書き込みをする人というのは、まず注目されます。そして、そのあまりの積極性に周りがひいてしまうということも事実としてあります。私も、winはどんな人物なのか注目していたし、恐れていたような部分もありますw。

RUSH の発言 :  
途中までは、ほんとにネットジャンキーなのではないかと、そういう疑惑も生まれていたんですけどw

ネコリコン の発言 :  
winの見え方に関しては、こちらが作り出したものでもあるんです。『ネコリコン』のようなマスコミが、情報を還流させて再生産した結果であると。でもそれは、直接コミュニケーションをとってみるとあっけなく崩れ去るものでしかなかったりする。ある意味で、現実の社会に起きているメディア現象をネコミの中で再確認できたように思います。

RUSH の発言 :  
なかなかできない経験だものね。情報編集の恐ろしさを実感しましたよ。

送信(S)

「ネコミ」とは?

ファイル(F) 編集(E) 表示(V)  
操作(A) ヘルプ(H)

宛先 :

ネコリコン の発言 :  
ネコミの大きな特徴は、授業と平行して履修者が参加するゲームが存在するという事です。ゲームは、オンライン上で、匿名状態でコミュニケーションを行ない、課題をこなしていく形式のもので、それぞれが、グルフ(グループワーク)の形で取り組みます。

司会 の発言 :  
参加者全員が、一昨年はある会社、昨年はある街、今年は大学に属しているという設定で展開されています。各人はこのフィクションの中で、ネット上の自分を確立するわけですね。

工場長 の発言 :  
昨年は、一つ一つのウェブ掲示板が同じ家に住んでいるという設定でした。それぞれの家が一つの街にあって。

ネコリコン の発言 :  
いろいろな架空の設定をする理由は、ネコミ上に小さな世界を再現したいからだと思っております。「会社」、「街」、「大学」、と設定することで、単なるネット上の人の集まりだったものが現実にあるコミュニティのようになる。そして、自分がそこにいる存在感を味わえます。

送信(S)

はじめに

ファイル(F) 編集(E) 表示(V)  
操作(A) ヘルプ(H)

宛先 :

司会 の発言 :  
SFCの大人気授業である「ネットワークコミュニケーション」(加藤文俊環境情報学部助教授担当)は、特色のある授業として有名です。この授業について、2003年度の授業担当ステューデント・アシスタント(SA)だったネコリコンさんと工場長さん、そして当時履修者だったwinさんにお話をうかがいたと思います。なお、ネットワークコミュニケーションということ意識して、実際にインスタントメッセージを介してインタビューしています。よろしくお願ひします。

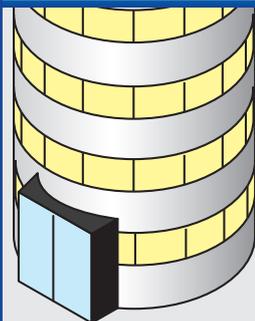
ネコリコン の発言 :  
よろしくおねがします!

工場長 の発言 :  
お願ひします。

win の発言 :  
よろしくおねがいます。

RUSH の発言 :  
お願ひします。

送信(S)



注釈  
▼インスタントメッセージ  
ネット上で、登録した相手が呼び出し可能かどうか(在席中か外出中かなど)を常に確認でき、呼び出した相手とチャットできるシステム。  
▼w  
「(笑)」と同様の意味で使われる記号

## 登場人物紹介

司会…本誌編集委員

ネコリコン…2003年度春学期の「ネットワークコミュニケーション」授業運営スタッフ兼開講期間中に毎週発行されていたネコミ全体の様子をレポートしたニュースペーパー『ネコリコン』の編集員。

工場長…2003年度春学期の「ネットワークコミュニケーション」で、ネコミパッチなど主にグッズ製作を担当していた授業運営スタッフ。

RUSH…2003年度春学期の「ネットワークコミュニケーション」授業運営スタッフ。ネコミタイム社長フォロー一部部長や、ネコミ不動産社長秘書など、さまざまな架空の役割を演じ分けた。

win…2003年度春学期の「ネットワークコミュニケーション」履修者で、2004年度春学期の同科目のSA。

FTF と CMC

ファイル(F) 編集(E) 表示(V)  
操作(A) ヘルプ(H)

宛先 :

司会の発言：  
ネコミを体験することで、ネコミと対比されるFTF (face to face) について考えは変わりましたか？

工場長の発言：  
FTFって何気ないんですよ。そこにいるっていうだけでコミュニケーションになる。でもCMC (Computer Mediated Communication) は違う。発言しなければ、いるかどうか分からない。それって当たり前のようで、この授業を受けるまで意識できていなかったことです。

ネコリコンの発言：  
それは僕も感じました。ただ、同時にその差ってあまり大きくないかもしれないということも感じました。ちゃんと向かい合ってメッセージを読み取る努力をしていけば、FTFと同じように相手のイメージを構築できる。この3年間では、驚くほど履修者のリテラシーが変わってきているんですよ。

工場長の発言：  
あらかじめ、ある程度の目的意識を持って授業を受けている人が、興味本位で受けている人よりも増えてきている感じがします。

司会の発言：  
その変化は、どのようにしてわかったのですか？

winの発言：  
たとえば、今年はネコミ用の個人ウェブページを作って公開している人がいるんです。自分を知ってもらうことで人との橋を結ぶ道を拓いて、お互いのことを積極的に行こうという姿勢が見えますね。

送信(S)

「ネコミゲー」の目的

ファイル(F) 編集(E) 表示(V)  
操作(A) ヘルプ(H)

宛先 :

RUSHの発言：  
正直、最初から「ネコミゲー」に目的があったわけではないと言ったら語弊がありますが、やっているうちに、こういうことなんだ、ってわかってきたような感覚です。そのあたりが、いわゆる「プロジェクト」とはちがうと思います。

工場長の発言：  
いろいろなことを試して、その反応を見て作り上げていったような感じですね。

RUSHの発言：  
まさにそれ。

ネコリコンの発言：  
生き物を育てる感覚に近いかと。

司会の発言：  
従来のプロジェクトは、前もって目的があるわけですね。

ネコリコンの発言：  
その意味でも、従来の授業の枠組みを超えているのかなと思います。授業外の時間にこそって同じにウェブサイトにアクセスし、その反応がダイレクトに返ってくる。

工場長の発言：  
そうそう。たとえば『ネコリコン』を毎週配っているその反応が話題になっていたり。そうしたらもうやめられないじゃないですかw期待されたら毎週出すしかない!みたいなw

ネコリコンの発言：  
ネコミは、循環するって仕組みがポイントだと思うんです。授業はぎっかけに過ぎなくて、そこで学んだことをネコミゲーってゲームを通して体験、検証して、結果をまとめる。願わくば、大学などで学術的な成果としてまとめる。その成果を次の授業やネコミゲーに生かす。ただ、個人的に一番弱いと感じているのは、アカデミックなアウトプットの部分かなと。

工場長の発言：  
そういう意味で発展させたいですね。

ネコリコンの発言：  
~\_~

送信(S)

「ネコミ」のこれから

ファイル(F) 編集(E) 表示(V)  
操作(A) ヘルプ(H)

宛先 :

ネコリコンの発言：  
この授業は完成度が低い部分もあると思います。運営側ですらマネージメントしきれていない部分も多いですからw  
でも、それは従来の授業観での話。ネコミって、大学の中に生まれた新しい生き物なんだと思います。みんなで大切に育てて、何か世の中に通用するような新しい形に育つといいなと思ってます ^\_^

winの発言：  
螺旋のように発展していくことを目指したいです。確実に一歩一歩前進する実感は味わえなくても、回り道しても結果的にそのうちにあるベクトルを紡ぎ出し進んでいく。学問として定義するとき余計な物として省いてきたものにももう一度目を向けて、どうしてこれは省かれたんだろうとか、実は大事な事だったんじゃない? とか。やっぱり皆で育てたい…今の段階だと漠然としか言えないんですけど。

工場長の発言：  
まあ私としては部活みたいにw、ずっと続いていけばいいなと思います。こういう運営形態が。

ネコリコンの発言：  
ケータイとかメッセ (インスタントメッセージ) とかSNS (ソーシャルネットワーキングシステム、本誌特集11-13ページ参照) とか、ネタ的にもまだまだ続きそうな感じです (笑)

送信(S)

ブログ [blog]  
(ウェブ (web) とログ (log) との造語ウェブ  
ログ (weblog) の略)

ニュースや事件、趣味などに関し日記形式で  
自分の意見を書き込むインターネットのサイ  
トやホームページ。開設者が個人の意見を表  
明していくことを基本としている点が掲示板  
と、閲覧利用者が自由に意見を書き込める点  
がこれまでのホームページと異なり、個人ジ  
ャーナリズムとしても注目されている。作成  
や管理が非常に簡単に行なえるソフトが公開  
され、1999年頃からアメリカで広まった。  
三省堂「デイリー新語辞典」より

これまで、あくまでも私的な思いの吐け口  
に過ぎなかった学生の個人サイト(ウェブ日  
記)が、weblog(以後ブログ)によってその  
役割を変えつつある。

キャンパス環境でブログを普及させること  
に、どのような意味があるのか——SFCに  
ブログを普及させた仕掛け人であり、自身が  
カリスマ的な「logger(ブログを書く人)」、  
である松村太郎さん(政策・メディア研究科  
修士課程2年)に聞いた。

### 「デジタルキャンパス」に風穴

2001年の9・11以後、米国ではブログ  
を使ったネット上での言論が、その影響力を  
急速に伸ばした。その勢いは、2004年の  
大統領選挙でハワード・ティーン候補らが選  
挙活動にブログを使い、支持層を大きく広げ  
たほど。SFCでも松村さんをはじめとする  
情報感度の高い人々によって注目されていた。

2002年秋——アメリカでの動きを受け  
て、小檜山研究室などが実験的にブログを設  
置し始めた。

「今までの研究室のウェブ 사이트は、だんだ  
ん更新されなくなって廃れてしまうことが  
多かったんですよ。それが、ブログによって  
情報の更新・外部からのコメントやトラッ  
ックバックが盛んにされている様子を見て、「こ  
のメディアはすごいな」と感じました」。

小檜山研究室に所属していた松村さんは、  
このように当時を振り返る。しかし、その後、  
彼はもつと驚くことになる。

「当時、僕のウェブ日記は1日に50人くらい  
のアクセスがあったんですが、それをブログ  
に切り替えた結果、1日あたり3000、  
5000人が見るようになったんです」。

ブログの力に突き動かされた松村さんは、  
Triggers, SFC Bloggers Project(以後  
Triggers)を発足させた。

「みんなが日常的にウェブ上にテキストを書  
いたり、画像をアップしたりしているという  
このキャンパスの特殊な環境を有効に活用  
したい」。

「学生の書くウェブ日記の「情報」は投げっ  
ぱなしなので、再利用ができないし、発展が  
ないところももったいないと思います」。

松村さんの問題意識は、彼の言葉で言うところの  
情報の「抜け」や「まわり」の悪い、発  
展途上の「デジタルキャンパス」と向き合う

ことから始まった。

### 10人に1人がloggerになるまで

ところで、TriggersはブログをSFCで  
普及させると同時に、普及に伴う障害や導入  
後の利用状況をモニタリングしている。当初  
は松村さんと濱野智史さん(政策・メディア  
研究科修士課程2年、熊坂賢次研究室・國  
領二郎研究室所属)による2人だけのプロジ  
ェクトだったものが、講習会を開くうちに、  
興味を持つ学生が集まり、半年間で10回もの  
意見交換会が有志で開かれるまでになった。  
そこでは、ブログとビジネス、ブログと著作  
権、ウェブ日記文化、ネット文化などのテ  
マについて白熱した議論が繰り広げられたと  
いう。また、2003年度秋学期の「情報通  
信文化論(小檜山賢二環境情報学部教授担  
当)」という授業では全受講生に各々のウェブ  
スペース上にブログを開かせた。こうして  
プロジェクトが立ち上がったからだった6  
か月でSFCの学生の10人に1人がブログを  
持つようになった。この時点で、ブログを普  
及させるといつTriggersの目的はほぼ達成  
されたかのように見える。しかし、現在の  
SFCでのブログ文化は、松村さんの期待し  
ていたものとは違う方向に進んでいるという。

### bloggingの落とし穴

#### ——ブログはウェブ日記じゃない

「ほとんどの学生はブログを今までのウェブ  
日記と同じような使い方しかしていません。  
アフォーダンスの高いツールを目の前にして  
もなお、「読んでほしいけど触れないでね」  
という前提がしいてあるようなウェブ日記

が続いています」。

松村さんはこの現象を「面白い」と分析し  
つつも、少し残念そうな表情で語る。

「ブログを書くことをbloggingとよく言  
うんですけど、これは単に「書くこと」だけ  
ではなくて、他人の記事を読んで、自分の考  
えをそこに追記したり、コメントしたりとい  
うところまで含めた、「読み書きのコミュニ  
ケーション」のことだと思っただけ」。

更新されたブログを一覧にしてそれらのサ  
マリイを表示する「SFCブログアンテナ」  
を松村さんが設置したのは、他人のブログを  
読んで反応するきっかけをつくるため、つま  
りbloggingをしてほしい、という思いからだ  
ったのだ。

#### 学生がSFCを批判的にみるきっかけ

#### ——一人一人がジャーナリスト

bloggingによる「コミュニケーション」は「対  
一のものだけでなく、一対多、多対一という形  
をとる場合もある。ブログが「個人ジャーナ  
リズム」の発展に寄与していると言われる由  
縁だ。たとえば、購読者2000人以上を誇  
るメールマガジンを配信するSFC CLIP(注)  
は、2004年度よりそのニュースサイトに  
ブログのシステムを導入している。さっそく  
記事へのコメント、トラックバックが寄せられ  
ており、これまでにないメディアとして試行  
錯誤している。松村さんは、個人のブログが  
SFC CLIPのようなメディアと対等に読まれ  
ることにこそ意義があると信じているという。

MAY 2004

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

## BLOGをCNSに導入

現在、MovableTypeというツールの簡単設置方法を解説しています。  
↓こちらからどうぞ！

▶ **blogkit**

## SFC BLOG アンテナ

SFCじゅうのBLOGを、更新されたらすぐにチェックできるアンテナです。RSSという更新設定XMLファイルを収集利用しています。  
↓こちらからどうぞ！

▶ **blogwatch**

## SEARCH

Search this site:



「たとえば、SFC CLIPには直接載せられないようなSFCへの不満や意見もあります。だけど、そういった意見もあるという事実を同じウェブ上で見ることができている状態がすごく正常だと思うんですよ」。

SFC CLIPのように、購読者が増えて公共性を獲得すればするほど、メディアは突出した意見記事を書きつらくなる。しかし、だからといって多くの学生の本音が公に出てこない状態では、議論すらできない。例えば、まず学生が個々のブログを通して自由に意見を発表し、コメントやトラックバックをきっかけに議論が起こる。そして、それがある程度の論理的な意見としてまとまればSFC CLIPで記事になる——このようなプロセスがあれば、ブログはSFCに風通しの良いキャンパス環境をつくりあげるきっかけにもなるのではないか。

**研究活動にブログを活用**  
——情報は出せば、集まってくる

松村さんはbloggingの拡がりをもたらした

得るこうした好影響とともに、それが個人の研究活動に与えるインパクトにも注目している。彼自身、自分のブログをメモ帳、アイデアノート、スクラップブックとして活用。そこに集められた情報は、最近では企業に参照されるほど信頼度の高いリソースとして利用されている。

「発見した情報、考えたことやアイデアを日々掲載するんですよ。すると、それに対して「こんなものもあるよ、あんなものもあるよ」とか、「これおもしろいね、ちょっと作ってみよう」といった反応がすぐに返ってくる。出した情報そのものが、新たな情報を集めてきてくれる。情報の「抜け」が良くなったり、「まわり」が早くなるのはブログの効用としてすごくありますね」。

ブログの面白さは、情報を発信するためのツールが、いつのまにか情報を収集するツールに変わってしまう点にあるようだ。松村さんはまた、ブログを導入してから研究が「加速している」と表現する。誰もが彼のように質の高い情報を提供できるわけではないこと

は確かだ。けれども、思いきって情報を発信し他者からの反応をみることで、情報発信の質を高めることができる。多くの学生がこうしたサイクルに挑戦すれば、ゆくゆくはSFCのブログ競争を勝ち抜いた情報」という付加価値が出来るかもしれない。

とはいえ、個々の情報を閉じた形で提示するウェブ日記の段階をまだまだクリアしていない状況に対して、松村さんはどう働きかけるつもりなのか。

「ブログは他人の意見を読む、他人が考えていることを知るきっかけ。発展すれば一緒に議論や共同研究をすることにつながる。チャット、メールに続いてブログが来るような、そういうコミュニケーションタイプな動きをまずキャンパス内で実証したいです」。

松村さんの挑戦は、まだ始まったばかりだ。

(注) SFC CLIP  
2001年に中島洋研究室のプロジェクトとして始まった、SFCに関するWEB/メールマガジン。

まつむら たろう  
**松村 太郎**  
1999年に環境情報学部に入学。一貫して「デジタル(デジタル＋アナログ)」、「個人メディア」をテーマに研究を続けている。現在、政策・メディア研究科修士課程2年。小椋山賢二研究室・加藤文俊研究室に所属し、「個人メディア」としてのブログ、ケータイに着目している。  
<http://www.tarosite.net>

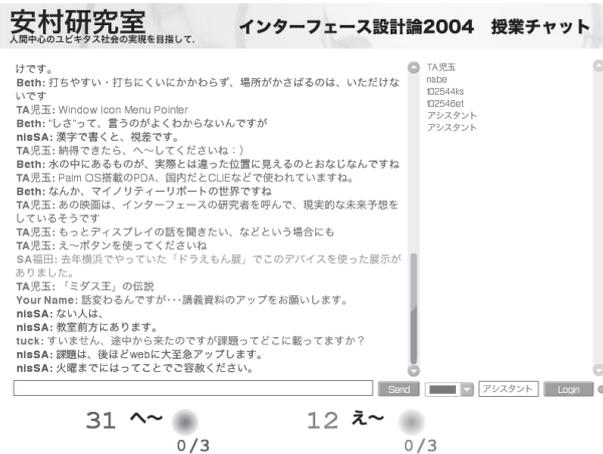


学内のコミュニケーションといえば、授業の話は欠かせない。

講義中の教員と学生、そして学生同士の関わり方について、面白い試みをしている授業を紹介しよう。

## 進化する授業

### インターフェース設計論



「インターフェース設計論」(安村通見環境情報学部教授担当)では、質問のために声を出す必要がない。なぜなら授業用スライドの横に、上のような学生・SA・TAのためのチャット用スクリーンが設置されているからである。

この授業でチャットが利用され始めたのは2年前。安村環境情報学部教授はこう語る。「私が参加しているWISS(注)という学会では、研究発表と同時にチャットを進行させるという試みが8年ほど前から行なわれ、それがかなり上手くいっているんですね。それで、このシステムを授業に応用できないかと考えたわけです。

一般に、講義形式の授業は一方向的になりがちで、気軽に質問を投げかけられない学生も多い。安村教授は、授業は相互的であるべきだという思いから、「いかに負担をかけずに、学生が意思表示できる環境を作るか」をSA・TAたちと模索してきた。

「技術的にも試行錯誤でしたし、履修者から『チャットの画面が気になって授業に集中できない』といった意見をもらったこともあります。しかし、そういった声に敏感に反応し、対策を打っていくことで、理想的な授業に近づいたと確信しています」と、TAの児玉哲彦さん(政策・メディア研究科修士課程2年)は熱弁する。

最新の試みとしては、ネット上にある「へえ」ボタンの設置が挙げられる。講義に感銘を受けた履修者がクリックすると、チャット画面の下部に表示された「へえ」の数が増えるのだ。チャットでの発言よりさらに負担がかからない意思表示ツールとして導入されたが、まだまだ改善の余地があると児玉さんは言う。「これをきっかけに、更に履修者と近づけるような授業を目指します」。

### ネットワーク情報産業論



ネットワークを介したコミュニケーションを利用する授業としては、「Digital Video over Internet Protocol」と呼ばれるリアルタイムでの授業の中継技術とweblog(本誌8—9ページ参照)を利用した「ネットワーク情報産業論」(國領二郎環境情報学部教授担当)も開講されている。具体的な事例を検討しながらネットワーク情報産業の特質を探り、新たなビジネスを展開する企業について議論する授業である。

本年度は、日吉キャンパスのKBS(慶應義塾大学経営管理研究科)の学生も遠隔でリアルタイムで議論に参加している。この環境を提供するのが、村井研究室発のWIDE Project, School on the Internet (SOI)だ。

Weblogの利用を推進するSAの濱野智史さん(政策・メディア研究科修士課程2年)は、「本来私的な知的財産である『授業ノート』をネットにアップして共有しよう、というくらいの意味で授業ブログをやっています。だから、SAさんがアップしている「正式版の」ノート、というふうに思ってほしくない。他の学生さんも、他の授業やイベントなどでも同じ試みをゲリラ的に展開してほしい。ブログはとても簡単ですから」と語る。

このような実験の数々は、学生だけでなく学外の人でも参加できるように、大学の授業を教室の外へ拡大していこうというSFCらしい取り組みの例である。

## 授業中に「へえ」ボタン？ よりインタラクティブな授業へ

(注) WISS : Workshop on International System and Software の略。  
<http://www.wiss.org/index.html#news>

# SNSの先輩に聞こう！



## 「友達100人できるかな？」

さまざまなコミュニティで信頼関係を維持しながら、その間でいわば交通整理のような形で人と人とを結び付けている人々が、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)に出会い、そこに大きな可能性を感じている。彼らにSNSの現在、危険性、そしてこれからについて語ってもらおう。

### SNSの何が危ないのか？

**須子** 現段階としては、SNSをどうやって利用している？

**大月** 僕がGmail(2004年よりスタートし、現在5万人以上の登録者数を誇る日本最大規模のSNS)を使っているのは、他のSNSよりコストがかからないから。Mixi(日本のSNSのひとつ)の場合はみんなの日記にコメントしたりして、常にコミュニティを維持するようなプレイヤーにならないといけないけれど、Gmailは、互いに紹介が終わった瞬間に関係がいったん固定される。その状態で他の人の前に提示されるっていうのが面白いよね。中でも「みんなの印象」が大事。他人からの印象でその人が重層的に見えてくる面白さが、Gmailにはある。

**島田** 毎日新しいところに顔を出していると、その関係をどうやってキープしていくかがすごく重大な問題。でも、僕の場合名刺を持っていなかったし、年賀状をやる習慣もない。そのとき、GmailやOpen(アメリカ合衆国で普及しているSNSのひとつ)のようなSNSがあることで、繋がりがキープできた。あと、友達に自分がコメントされることで、自分がどういふ人間なのかを知らせるコストが減るよね。

**須子** 人との繋がりが維持できるっていう点で、便利だと感じた最初の衝撃はメッセンジャーかな。SNSではさらなる特徴として、自分を經由して大勢の人がマルチホップ(注1)で繋がっているところ。AさんからBさんに書いた紹介文がなぜかCさんに読まれるようなことは、今までのリアルなコミュニティでは起こりにくかった。

**大野** でもこれはすごく重要なことで、普段あまり会わない人の手助けや情報でいろいろな問題が解決することはあるよね。

**濱野** 便益と楽しさがある一方、「Gmailってポケモンっぽ

くてヤ！」という意見を聞いたことがある。つまり、「友達」を必死にコレクションしてひけらかしている感じが気持ち悪い！と。ごく私的なものを共有するときの温度差は必ず問題になる。

**須子** そうなってきたときに問題なのが、リンクの信用性に関してユーザーの間で共通意識がないこと。どの程度の関係が「友達」なのか、という定義バラバラなままだから、どの程度に自分のリンク基準を持ってきたらいいのか分からない。

**大月** 僕は人に出会ったのが好きだからほとんど来て欲しいけれど、何か条件がないと本当にただの友達コレクションになっちゃうからね。

**大野** 初期利用者は意識してやっているのに、SNSの性質を特に意識していない人が、とにかく流れに乗ろうというだけでそれを使い出してしまうのが怖い。自分の友達の多さを誇示するためだけにひたすらリンクを張ってしまうから。

**大月** 可視化制限する方法もある。例えば検索条件で見られる範囲を限定して、「友達」という認知限界を運営者側がつけることもできるよね。

**須子** 友達の友達…って6人繰り返すと、世界中つながるっていうよね。ネットは世界中誰でも繋がっちゃうから、友達とか知り合っている関係にあえて重みをつけるのは意外と重要。

**濱野** 今、日記をネットで紹介するととなると、完全に公開するかピンポイントで見せるかしかないでしょう。友達と、もう少し先にいる興味がある人に見せたいというような曖昧な境界線が引けない。気楽に書いていたのに、実は世界中の人に見られていて、知らない人たちにこてんぱんに叩かれて閉鎖する…ということが繰り返されてきた。



須子 善彦

政策・メディア研究科博士課程1年。"sfc-connect"プロジェクトという名前で、知人関係を用いたマッチングシステムを研究。2003年より、会員制のSNSサービス「SIVコネクト」を実験運用してきた。greeの普及を受けて、SFC生の人材マッチングサイトwww.sfc-connect.netを再開！

**須子** コミュニティごとに見せる情報を変化できれば便利だよ。でも、例えば犯罪に使われた場合に、管理者に公開義務があるのか？ といった問題は起きるだろうね。プライバシーだとか信頼だとか言っている割に、システムを使うこと自体の吟味がユーザーの間に足りていない。

**濱野** 簡単に悪用的な事件が起きる状況ではあるね。名前や年齢はともかく、友人関係や嗜好、思想が広範に漏れて、大量に集団プロファイリングされるのはいかがなものか、という反動的な主張もでてくる。

**島田** 出している情報・いけない情報を区別できない人が、SNSやweblogに手を出すのがまずい。僕、最近weblogに自分の意見をあまり出さないようにしてるんだ。出しすぎると、いろんな人に広がったり、googleとかにアーカイブされたりして怖いから。例えばの話ですけど、仮に昔自民党のことをさんざん馬鹿にしておいて、それでもし自分が自民党に関わりをもって仕事をするようになったときにそれを見られたらどうするの？ と。

**関口** 私はOPENを初めてまだ一ヶ月で、友達は13人。知らない人とリンク張るのは怖い！ と思っているのに、なぜか日記は公開してるんです。危険性に気付いていないってことですよね。

**須子** 何かのタイピングで、大勢の前に引きずり出される怖さがあるよね、ネットの世界には。大切なのは、自分で出した情報をどこまで管理できるか。例えば自分の書いた



大月 信彦

政策・メディア研究科修士課程2年。サイバースペースと政治をテーマに研究を行なう。ブログは「nobuのメモ帳」。ネットおもちゃを試してみるのには基本的に好き。

文章がゆるゆるのキャッシュに載ってしまうのは、自分の管理を離れているということだよ。

**大月** でも、いくら情報漏れが怖いといっても、現段階ですでに情報自体が飽和しているとも言えるよね。海の中の砂の一粒になれちゃうから、感覚的には怖くない人もいるんじゃないかな。

**須子** でも、技術が発展すれば簡単に個人に迫り着けるからね。技術の進化による利便性とプライバシー保護などのバランスで、社会的な共通意識としてどこが最適点なのか話し合いながらいつも揺れ動いていると思うけど、ねずみ講などの大きな事件が起きて、世論がネガティブな方向に反動してしまうのが怖い。

**島田** 今までの情報技術の発展は、マスのデータを匿名な形で、全体集合として統計的に使うことが多かった。SNSがこれと決定的に違うのは、利害関係があるもの同士のデータを含んでいることで、ある特定の人物を簡単に懲らしめられること。ある人間にとってアクセス鍵になるところを簡単に切ることができる。

**大野** 特に、迷惑メールが一通来ただけで過敏に反応してしまう世代の人もいる。そういう人たちが悪質なダイレクトメールに騙されたり、おれおれ詐欺にはまったりしちゃう。ネットワーカーから見れば当たり前のことでも、例えば関口さんみたいに当たり前だと受け入れていない人がたくさんいるわけ。



島田 敏弘

総合政策学部4年。國領二郎研究室でネットワーク経済に関する研究をしている。学業の傍らで編集者のタマゴとしても日々修行を重ねており、テクノロジービジネスの情報提供サイト『CNET Japan』にも執筆経験有り。最近の興味対象はネットワーク社会における「情報の経済的価値」や「メディアのあり方」など。

**関口** 何が怖いか分からないのが一番怖いんですよ。どこに危険因子が隠れているか分からないし、気付かない。それはどうすれば気づけるようになるのでしょうか。

**大月** いや、それは簡単にはわからないんだよ。「危険因子」で得をしている人がいる以上、情報に対して敏感でなければ危険からは逃れられない。

## SNSの可能性に、SFCはどう関わるのか？

**関口** 私が疑問に思っているのは、SNSをきっかけにして、全く知らない人間と友達になることはありえるのか？ ということなんです。

**大野** 私は、既存集団の中では繋がるし、それ以上では絶対に繋がらないと思う。その線引きは難しいけれど、例えばSFCのような既存集団が抛り所にならないと厳しいんじゃないかな。

**須子** SNSのバーチャルな関係がリアルな人間関係に影響を与えるかという議論は、まだ結論が出ないと思う。というのは、SNSを早くも使っているユーザは特殊な存在で、お互いにネットワーカーとしてリアルでも繋がっているから。

**島田** リンクする順番としては、リアルで会ってからSNSというのが普通。リアルなコミュニケーションをより促進するというイメージなのかな。

**濱野** これはSNSに限らないけど、情報や人間が「リンクすること」でコラボレーションをどれだけ支援できるかが重要だと思う。例えば、今のSFCの大学院には「プログラム」(注2)というものができて、ダイアログ型(注3)のネットワークという性質も強くなってきている。そこに、どうやってフォーラム型(注3)の水平的なつながりの要素をSNSで付け足していけるかな。

**須子** それは学際キャンパスの可能性に直結していることだね。新しい通信コミュニケーション技術を取り入れやすい環境だから、パーソナルメディアに落ち着きが見えてきた反動で、偶発的な出会いを求めて今のソーシャルネットワークワーキングが存在している。その先に、もとのコミュニケーションとかBBSとか、フォーラムとかコンソーシアムっていうのが出てくるのかな。

**島田**むしろそこがうまくいかなければ、普及しないだろうし、普及する意味もないよね。

**須子** 具体的に何が良くなるのかを提示できて、それが実際に良くなったロールモデルがどれだけいるか、だね。ネットワーカーと呼ばれている人たちがそうなるかもしれない。



**大野 亜沙子**

環境情報学部4年。2003年春、「SFCのイエローページ」spring(SFC Project RING)を立ち上げる。ありそうでなかった、SFCの学生間のプロジェクト情報交換サイト。http://spring.sfc.keio.ac.jp/

**濱野** ネットコミュニケーションをプロデュースする人が、明確なビジョンと意思を持ってコミュニケーションの色を作っていないと。今後、SNSは乱立していくだろうけれど、設計者やプロデューサー、初期利用者の意思が責任を伴ってくるんじゃないかな。

**大野** SFCから出ていくものも多いだろうね。ただ、SOI(本誌10ページ参照)にしてもweblogにしてもネコミにしても、授業と関連してやらされているところがとても残念。OPIOみたいに外部のものが広まっているのは稀だね。

**島田** 授業の中で一人一人がどういう使い方をしているのか、だね。例えばOPIOは、最初は授業やゼミでやっていたことが、今は自発的に行なわれている。SFCからゆくり新しい概念が出ていけばいいんじゃないかな。SFCには、常にチャレンジできる環境が出来ているのが面白い。

**大野** 私は、OPIOのようなサービスはむしろ、SFCからは出ないと思う。SFC生はそういうものの危険性を分かっているから、このツールがあればいくらでも世界中の人と繋がるというのは幻想だと理解した上で、手堅く、効果的な使い方をしている人が多い。でも、こういう人たちが地道にでも着実に出ていくことが、SFCの理念に合うんじゃないかな。

**須子** 実際、それが起こっているんだよね。世の中に発信される技術とかコンセプトというのは、どこからやって



**濱野 智史**

政策・メディア研究科修士課程2年、國領二郎研究室と熊坂賢次研究室に所属。Weblogを観察対象にネットワーク社会についての研究を行なう傍ら、本号他企画に参加している政策・メディア研究科修士課程2年松村太郎との、キャンパス向けweblog普及活動Triggersにも携わる。

きたか分からないけれどいつのまにか市民権を得ている。それがたまたまSFC発だったんだよ、そんなこと誰も知らないけど、というのが多いんだ。身近な例でいうと、コンピュータをケーブルや無線LANにつなぐだけで自動的にアドレスが割り当てられる、DHCPというプロトコルがある。それがSFC発だというのは、あまり知られていない。

**濱野** 情報技術はもうインフラの部分ではだいぶ普及してきているから、これからは実際にどう使うかというフェーズに移ってきている。SFCでは、そういう部分での貢献がこれから課題になっていくんだろうね。

**須子** SFCでは、多様性を増やす技術の最先端を体験して、それが良いものか悪いものかを判断する前に、とりあえず遊んでみて可能性を追求する遊び心があることが大切なんだと思う。SFCの面白いところは、0を1にする、つまり何もないところから何かを創造することが好きな人と、1を80にする、つまりそれを実際に利用できるまでまで発展させることが好きな人が両方いるところなんじゃないかな。

※注1 マルチホップ…ここでは、知人関係の距離を指す。友達1ホップ、友達2ホップ、それ以上はマルチホップと考える。  
※注2 プログラム…大学院における研究領域ことにカリキュラムを構築し、その枠のことで高度な専門人の能力を身につけるもの。  
※注3 ダイアログ型・フォーラム型…金井壽宏「経済学者著「企業者ネットワーク」の世界」で示される概念。ダイアログ型はメンバー間の強くて閉鎖的な結合で深い対話が可能、フォーラム型は開放的なメンバーシップで多様な価値のゆるやかな結合が可能、と分類される。



**関口 仁美**

環境情報学部2年。本誌22号副編集長を務める。座談会では、いまいちネット社会SFCに馴染めていない「アナログ人間」代表として、SNSにおける先輩たちの話を聴く。

古きよき時代の物語は、  
おわった。

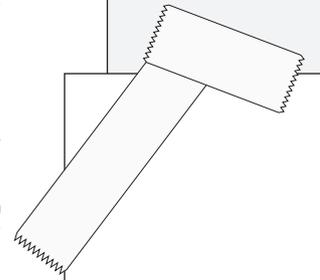
環境情報学部教授 熊坂 賢次 寄稿

自己責任？

KEIO SFC REVIEWの編集部から、現在のSFCのネットワークコミュニケーション状況は6年前と比較してどのように変貌しているのかを検証してほしい、というメールをもらった。編集部による4つの取材記事があり、現状については正確な実態把握ができるので、「6年前のデータはどこにあるの？」と編集部にメールしたら、「それは、先生が6年前に書いた『ネットジェネレーションの期待と自覚』です」とリプライされてしまった。要は、この企画は昔自分が書いたものに責任をとって、検証せよ、ということかと納得した。同時に「最近流行の自己責任というパッシングか」と、ついほやいてしまった。

むかしの話

6年前に何を書いたか。まとめると、行為と関係と社会という3つの視点から、いくつかの社会現象の解釈を通して、ネットジェネレーションについてのコンセプトを提



示した。行為のレベルでは、「露出と覗き」という、ネットワーク以前では社会的な逸脱とレットテルが貼られる行為にかんして、それがネットワーク上になると、「日記の公開」のように、なぜかみんなためらいもなく許容的になってしまふ、という新しい「許容された逸脱的行為」の可能性を取り上げた。

関係のレベルでは、「探索と支援」のコンセプトを提案した。ネットワーク以前のコミュニケーションでは、希少性の所有（いいものは少ない、だから欲しい！）を前提にして、所有・非所有の格差を利用した関係（情報発信と受信、その社会関係への反映としての交換と権力関係）が優先されるが、ネットワーク以後では、財の豊かさとも共有（いいものはたくさんある、だからないなら、あげよう！）を前提にして、非有・共有の格差を利用した関係（探索と支援、その反映としての贈与と貢献関係）が優先されることを示した。これは検索エンジンの意味づけをもとに、社会関係の変化を予兆したものである。最後の社会のレベルは、今回のテーマとずれるので、ここでは省略する。

テクノロジーの恩恵

6年間でなかが変わったのか。圧倒的なまでのテクノロジーの進化である。ケータ

いはあつという間に浸透し、メッセージャーのようなインタラクティブなツールは若者ならば一度は熱狂しただろうし、ユビキタスという「いつでも・どこでも」という合言葉は完全に日常語化している。このような超高速の変化を眺めるかぎり、新しい情報技術は、メディアとしてまた環境として、現代社会を根底から揺るがしてきた。

取材記事をみて、安村さんの授業では、チャットを導入して授業中に質問に回答したり、流行の「へえ」ボタンで即時の授業評価をしている。國領さんは、授業を中継しながら、ブログを活用して授業内容の理解を促進させている。ここにはインタラクティブ性を追求して、学生の参加意識を誘発する仕組みが設けられている。また、加藤さんのネコミの授業は、対面とネットの2面の授業形態を設定して、多重の役割期待を演じさせながら、個のあり方を実践的に自省する仕組みをつくって、リアルコミュニケーションが対面とネットにおいていかに異質しかつ同化するか、を教えている。このようにSFCの授業は6年前の夢を見事に実現している。

甘かった認識

「露出と覗き」について、その方向が進んだことは事実である。しかし許容と逸脱の境界をどのくらいきちんと把握していたか、

という疑問である。その認識は甘かった。当時のメディア状況からすると、ネットワークコミュニケーションとリアルコミュニケーションとの間に、かなり安心していられるほど明快な境界が設定されていた。だから露出と覗きは「ありだよ、新鮮で楽しいよね」と安易に考えていた。境界があると思いつくことで、露出と覗きは社会的に許容されたわけである。しかしその後、現実はそのすごい勢いでその境界を融合していった。ネットワークが環境化するほど、ネットワークコミュニケーションは、リアルコミュニケーションと対立するものではなく、そのままリアルになってしまった。なので、一度、露出と覗きの間の暗黙の了解が崩されると、安易に露出をした者が周りの大勢から覗かれた結果として、バッシングの標的に晒され、立ち直れなくなるという事態が発生するようになった。他方、覗く方でも、ネットワークから離脱できなくなり、その世界に安住し、ひきこもりの状態に陥る者も出現し始めた。最近のSFCでは、このような学生がかなり多いのではないかと危惧している。

✓ 自覚の欠如とルール化への合意形成  
「探索と支援」についても、その方向はさらに加速され、情報共有の価値は重視されるようになった。しかしここにも問題は発

生した。たとえばP2Pのソフトウェアは「探索と支援」のツールであるが、それが事件になり、SFCでも日本レコード協会からクレームをもらうなど、その活用について社会的合意がえられないまま、事態が悪化している。オリジナリティへの尊敬と情報共有価値への思いをどこで調整すればいいのか、レッシュが「クリエイティブ・コモンズ」で慎重かつ積極的に主張する、その姿勢を理解することなく、安易にフェイス交換をする学生には、「自覚だよ」と、つい愚痴ってしまう。もちろんP2Pそれ自体を悪者扱いして、新しいビジネスモデルに挑戦しない企業も問題であるが、他方未来先導たらんとするSFCが、社会的合意形成を模索することなく、安易にテクノロジーに乗ることは許されない。今必要なのは新しいルールづくりに向けての実践である。

✓ 試される現実感覚

SFCは社会実験の場であり、どこよりもその先端性において社会的な支持を獲得しなければならない。とすれば、単にテクノロジーの新規性に酔うのではなく、その社会的活用における合意形成までを射程に入れて、実践がなされるべきだ。しかも現状は単純にヴァーチャルな空間での出来事という認識ではすまされない段階にきてい

る。ネットワークコミュニケーションがリアルそのものであることを社会的事実として認識すべきだ。最近流行のソーシャル・ネットワークキング・サービなどをみて、「友達の友達は、友達」という単純なルールが現実社会では通じないものだ、という自覚がないと、危険がいっぱいである。同時に、その自覚のもとでお気に入りの友達を100人探すことが求められる時代でもある。いかに新しい社会的現実を創造するか、その現実感覚が試されている。

熊坂賢次(くまさか・けんじ)



環境情報学部長・教授兼政策・メディア研究科委員

専門は現代社会論とネットワーク社会調査。新しい社会実験の場として、iMap(ライフスタイル調査)、リサーチQ(テレビ視聴質調査)、J-RESET(携帯活用のネットジャーナリズム調査)という3つのサイトをネットワーク上に立ち上げ、そこでその解析をもとに、現代社会のあり方を、実証的かつ実践的に研究している。

## SFCの臭いを 分かち合う方法



インターネットコミュニケーションには、どのような可能性があるのでしょうか？

インターネットは、情報をすべて数字にして自由にやり取りできる透明な空間。新しい空気みたいなもので、その中で何をするかという基盤でしかない。そこに、新聞、テレビ、電話、授業など、今までのアナログコミュニケーションの延長上にあるような、いろいろなものを作り出しているんだよね。さらに、もっと突拍子もない、全く新しいものも作られている。

例えば、SFCの近所には畜産業者があるので、キャンパスで臭いのするときがあるけど、「SFCって臭いんですよ」と言ってもキャンパスに來ないかぎり誰も信じてくれないでしょう。SFCのホームページを見た人が俺たちと同じ臭いを感じるためにはどうすればいいと思う？ 情報は全て数字に変えないといけないから、まずSFCに、臭い検知器を用意しておいて、空気中の分子を計算する。そして、臭いの原因である物質の度合いを数字にして配信し、各家庭のコンピュータのデバイスでそれを再生すれば、お父さん、お母さんとしての臭いを分かち合うことができるんだよ。こうなってくると、人間のコミュニケーションとしてかなり画期的なことが起こると考えざるを得ないね。

その例を具体的に挙げると、SFCでは、

## 「自由なコミュニケーションで自信を持って」 —村井純教授「ネットワークコミュニケーション」を語る—

インターネットが生まれたことで、コミュニケーションの可能性は無限の広がりを見せた。「日本のインターネットの父」と呼ばれる村井純環境情報学部教授が、ネットワークコミュニケーションについて語る。

目や耳  
が不自由  
でもコミュ  
ニケーションが  
とりやすい。

目が見えなくてもコンピュータの文字が読める  
ようなディスプレイがメディア  
センターにあるし、みんながラップト  
ップコンピュータを持つている環境ではおの  
ずから意思疎通がしやすくなっている。点  
字になっている書物しか読めない、手話を  
知っている人とか話せない状況では、限  
られた情報しか得ることができない。今ま  
ではそうやって、間接的なコミュニケーション  
に頼らざるを得なかったのに、SFC  
では直接的にコミュニケーションできるわ  
けだ。正に不可能を可能にしているよね。

我々が描いているような夢を実現している  
と思う。

物理的なコミュニケーションの技術は、  
もう相当進んできているね。例えば胃袋の  
ポリープを取り除こうとしたら、これまでは  
開腹手術していたケースでも、今は髪の毛  
みたいな一本の光ファイバーを送り込む  
ことによって、高解像度の映像を画面で見  
ながら作業できる。さらに、胃袋の中の映  
像だけじゃなくて、はさみで切る力なんか  
が全部数値になって、光ファイバーに乗っ  
て送られてくるようになってきたので、医  
師はそれを見ながら手術そのものもでき  
るんだ。ネットワークコミュニケーションは  
人と人との映像や音声によるコミュニケー  
ションを支えるだけじゃなくて、もっと力  
や温度などの広義の情報を上手く伝えるこ  
とで、胃袋の中の細かい作業と人との間を  
結び付けることもできる。



そういう全く新しい、広い意味でのコミュニケーションこそが、ネットワークコミュニケーションなんだ。デジタル時代のネットワークコミュニケーションにはさまざまなバリエーションがあるけれども、簡単に言うとな階層になつていく。まず、基盤となる数字を自由にやり取りできるような技術を開発していく。その上で、構築された環境を使った応用分野を社会の中でどのように展開していくか、また、その展開によって人間のコミュニケーションはどのように影響を受けるか、という研究を進めていく。



## 日本のオリジナルを待つ

「これからweblogは、どのように発展していくと予想していますか？」

日本の教育は、自己表現に関してかなり無関心だったところがあるから、こういうインターネット上のコミュニケーションが新しい道具として役立つと思う。教育システムが変わるのは時間がかかるかもしれないけれど、人が変わるのは環境を整えば速いんだ。ただ、インターネット上で使う道具は自由なので、義務的に利用法なんかを押し付ける必要はない。そういう意味で、自由があると表現形式が全く変わるだろうし、しかもブログは個人個人が社会性を持つていくところが面白いんだよね。自由なコミュニケーションや表現で自信を持つていくことが、次の社会で育つ人たちのた

めになればな、と思う。

アメリカ文化の中から出てきたweblogを日本のなかでどのように消化していくか、というところは面白いと思うよ。例えばアメリカでは、weblogを使ってジャーナリズムの空間などでの一攫千金のような使われ方が発達しているけど、それは自由に使った結果そうなったんだ。日本でそれを一攫千金の道にするのか、新しいジャーナリストメディアにするのか、それともプライベートをさらけ出す日記にするのか、新2ちゃんねるにするのか、まだ分からないよね。そこがやっぱり楽しみというか、大事なところだと思つよ。



## ねずみ講が治まったワケ

「ネットワークコミュニケーションの危険性についてはどうお考えですか？」

母集団のスケールが大きいと、みんなでひとりを集中攻撃するようなことが起きる。魔女狩りみたいな、怖いことがね。問題はそのときに、どうやってコミュニケーションをとれるかだね。大きい声で「ちよつと待つて！」って言うる奴がいると意外にそういう暴動は治まったりするわけで、上手くバランスを取りながら酷いことにならないようにするメカニズムがある。例えば、インターネットが初めて日本にできたとき、まずねずみ講に使われた。すぐに私のところに電話が掛かってきて、「お前がインターネットなんて作るからねずみ

講が発展して大変じゃないか」って責められたから、すぐにネットでそのねずみ講を検索してみた。でも、これがねずみ講だから気をつけろっていう情報ばかり見つかるんだ。つまり、インターネット上では悪い情報の足は速いけれど、良い情報の足も同じように速いんだ。ねずみ講はたしかに加速したかもしれないけれど、「ねずみ講に気をつけろよ」という情報がそれ以上に速く回ったから、傷口に白血球が覆いかぶさるように、良い情報が悪い情報を覆った。

そういう意味では、スケールの大きいコミュニケーションの流行は激しいんだ。このような中で新しいコミュニケーションのモラルやエチケット、ルールなどを作りながら進んでいくことが大切だ。



## インターネットの父、世界をつくる

「村井先生は今後、ネットワークコミュニケーションにどのように関わっていくのでしょうか？」

実際にインターネットが基盤として、あるいは環境として広がり定着してきた現在、新しい目標と方向性が見えてくる。特にテレビ会議やIP電話のようなリアルタイムのコミュニケーションがインターネット上で自由に使えるようになると、北半球をぐるりとみていた世界観がだいぶ変わってきけることを感じたりする。だって、時差が違つたりリアルタイムのコ

ラボレーションはやりにくい面もある。特に子供がかかわるとね。すると縦の関係、つまりアジアの連携がこれまでと全然違う意味をもつてきたって言う人がいるんだ。産業革命から飛行機ができ、8時間で行ける国が増えた。でも、東西に8時間と南北に8時間の違いを感じていた人は少ない。IT革命の結果、距離感に加えて、南北の8時間なら子供たちの教室をくつつけることはできるけど、東西じゃできないっていう新しい世界が見えてきている。

こんな経験を積み上げて地球全体のネットワークのデザインがどういうふうになるんだろう、という未来が見えてくるんだと思う。本当に臭いが伝わるの？ どうやったらできるんだろう、というような話が出てくると思うけれど、そういった基礎技術が社会にどういった影響を与えるのかを考えないといけないよね。

「俺たちが、しっかりと社会をきちんと作つていく」。そういう使命を持つていくことはいつの世でも一緒。たまたま、エキサイティングな基盤が用意された面白い時代に僕たちは生きていくけれど、どんな時代であつても、新しい人間関係にどうやって新しい力を注いで新しい社会を作つていくか、ということに挑戦し続けているんだ。

村井純(むらい・じゅん)

環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員  
SFC研究所所長/工学博士/日本のインターネットの仕掛け人。コンピュータコミュニケーション、オペレーティングシステムを専門としており、精力に実験・開発を重ねる。著書に、『インターネット』(若波新書 1998年(発行))などがある。



## 人工的な環境は 生物学的な身体に影響を与える



「ネコミ」(本誌特集6〜7ページ参照)のよ  
うなバーチャルな関係を築くゲームやweblog、  
チャット、掲示板などの技術が当たり前に普  
及している今、それらが個人のメンタルヘル  
スに及ぼす影響について、どうお考えですか？

例えば、暑ければ汗が出て、寒ければ毛  
穴が縮まるといった自律神経系の発達は、  
生まれて二、三歳の頃までの温度環境によ  
って決定します。しかし、空調設備のある  
快適な環境で育った赤ちゃんは、それらの  
自動調整機能が発達しません。ですから最  
近、暑くても汗が出ないために体温があが  
ってしまい、顔を真っ赤にさせて倒れてし  
まう子供がいるんですね。これは「人工的  
な環境は生物学的な身体に影響を与える」  
という例です。

つまり、心的な世界をすでに発達させて  
いて、身体的なリアルと心的なバーチャル  
の区別がついたうえでバーチャルの世界に  
入った人と、その境目がわからないままに  
バーチャルなネットの世界に入った人とで  
は、それが彼らに与える影響も全く違うと  
思うんですよ。空想や表象の世界に投げ込  
まれると、その中で万能感をあたかも現  
実での能力だと思ってしまうでしょう。  
エアコンの効いた空間は快適で、指一本で  
温度が調節できる。自分の思ったままに、  
状況のオン・オフの切り替えができる、と  
いうふうな。

「対人コミュニケーションにはかなわない」  
—濱田庸子助教授「ネットワークコミュニケーション」を語る—  
物心つく前からバーチャルの世界に接している子どもたちが成人しようとしている。こ  
れからの日本を支える若者たちとネットワークコミュニケーションの行く末に、濱田庸  
子環境情報学部助教授が警鐘を鳴らす。

でも、リアル

なコミュニケーション

では、そうはいきません。相手とのインタ  
ーパーソナルな世界を言葉以上のやりとり  
の中から感じたり調整したりできる能力が  
ないとコミュニケーションできない。そう  
いう訓練は、生まれた直後から、お母さん  
との間、家族との間、幼稚園の先生や友達  
との間で、知らず知らずのうちに訓練され  
ているものなのです。この体験が欠けてい  
ると、リアルなコミュニケーションが苦手  
で、バーチャルの中だけで自由に振舞える  
という子供が多くなる可能性は高いと思っ  
ています。実際、今の大学生が抱えている悩  
みは、私の世代であれば中学生が高校生く  
らいで通過している悩みですね。もちろん、  
「うまく友達とのコミュニケーションがと  
れない」、「集団に入れない」といった悩みは  
昔もあったでしょう。けれども、悩んでい  
るときにも自分の視点でしか考えられない、  
自分の大切なものがちよっとでも傷つけら  
れるとすぐにべししゃんこになってしまっ  
ような脆さを持った人からの相談が、近年は  
多いんです。さらに、6月に起きた佐世保  
の小學生による刺殺事件は、まさにこのバ  
ーチャルな世界とリアルな世界の境界の混  
乱から生じた悲劇と考えてもよいでしょう。

## アバター カウンセリングの登場？

—そういった症状には、どのように対処して  
いるのでしょうか？

例えば、テクノ依存症(注1)の治療には、  
対面のコミュニケーションを重視しますが、  
最近では「サイバーカウンセリング」や「ネッ  
トワークカウンセリング」が一つのジャン  
ルとして育ちつつあります。つまりこれか  
らは「アバター(注2)カウンセラー」のよう  
なものも出てくるかもしれません。

—逆にアバターを介してでないと相談ができ  
ないような人も出てくるのでは？

多くのネットワークカウンセリング(例  
えば医療相談サイトなど)では、最終的に  
は実際に医者に行くように勧めます。でも、



いずれは、ネットワーク上のカウンセリングだけで解決してしまうような世界が出現する可能性はあると思います。

―ネットワーク依存やテクノ依存症を個別に扱うようなカウンセリングはあるのでしょうか？

よく相談に来られるのは、ネットワーク依存型の生活からリアルな関係を持たなければいけない状況に立たされたときの悩み、例えば、「結婚をしたい」、「結婚生活がうまくいかない」といった悩みです。つい先日、システムエンジニアをしているご主人が暴力を振るうが、どうすればいいのかという相談を受けました。やはり、機械相手、長時間拘束されるような仕事をしていると、対人での情緒のやりとりがうまくいかない、感情のコントロールがうまくいかないことが多いのではないのでしょうか。一概にネットワーク依存症のせいとは言えませんが、少なからず影響はあるでしょう。



## ぴったりのタイミングで

うなずけるか？

―最近広まっているweblogやソーシャルネットワークワーキングでは、リアルにいる実名の相手とやり取りができます。その場合は、事情が違ってくるでしょうか？

重要な点は、結局のところ、入ってくる情報が視覚的な情報だけだ、ということ

す。ですから、脳の中で活動している部分が限られてしまうことには変わりないでしょう。

―日進月歩のIT技術によって、今後、音声のやり取りも増え、ネットワークコミュニケーションがよりリアルに近づいてくるということはあるのでしょうか？

本来、コミュニケーションは「五感で感じる」ものです。チャットを介したコミュニケーションでも視覚を刺激するテキストに情緒が入ってくるかもしれません。しかし、それはあくまでも視覚的な刺激があつて、それを受けた人の中に沸き起こってくる一人の情緒に過ぎません。対人コミュニケーションは、こちら側に情緒があり、こちら側も情緒があり、4人であれば4人の情緒の動きがあり、それを「場」で共有することによって生まれるのです。

例えば、全員でうなずく、というタイミングはどのようにしてとっているかを考えるとわかりやすいですね。これは、互いに目で見合っているから、ということだけではないし、音や声だけを聞いているから、ということだけでもない。五感を全て使い、さらに空気を通して情緒の動きを察し合うことができるからこそ「うん」と同じタイミングでうなずけるのです。

眉毛と目の動き、そして声の抑揚を真似ることができれば、ある程度まで「表情をコンピュータでシミュレーションすることは可能でしょう。しかし、それでも情緒の動きやそれをお互いに察知することのできる対人のコミュニケーションには到底かなわない。だからバーチャルのなかではす

いろいろなことができているようでいて、結局は頭の中の一部分しか使っていないということには変わりがないでしょうね。

## 不快な気持ちも

伝えられること



―リアル、バーチャルに関わらず「理想的なコミュニケーション」は存在するのでしょうか？

子どもの発達段階では、行ったり来たりできるコミュニケーションができるようになる。と発達段階が一つ進んだ、と言います。赤ちゃんとお母さんのやりとりのように、今言った言葉が、行つて返つてくるのが大事なのです。言葉のキャッチボールができて、さらに自分の中の情緒が適切な距離感を持つて伝えられることが「良いコミュニケーション」でしょうかね。ここで忘れてならないのが、良い感情だけでなく、不快感や嫌悪感などのマイナスの感情も伝えられることです。自分が不快に思っているときに、「それは嫌だ」と相手にうまく伝えられることが理想でしょう。

まだしっかりと研究をしたわけではないのですが、「相手の目を見る」ことがコミュニケーションの重要な位置を占めていることがわかってきます。子供は怒っているときのお母さんの顔を見たりしませんよね。自分の中で「怖いお母さんのイメージ」と「優しいお母さんのイメージ」があるとき、目の前に怖いお母さんが見えてしまうと、余計怖くなってしまふんです。私の子どもも

「怖くないから見てごらん」と言つても見ようとしません。外の世界を直視できない子どもは、目の前で誰かとコミュニケーションしているように見えても、実際には頭の中のイメージと対話しているだけである可能性はおおいにあります。ですから、五感を使ったコミュニケーション、対人のコミュニケーションの意図的な練習が、子どもにも大人にも必要になってくるでしょう。

〔注〕テクノ依存症・一般的に、コンピュータに過剰適応した結果生じる失調症状。

〔注〕アバター・インターネット上で、顔・髪形・服装・持ち物などを自由に選択してつくったオジナルのキャラクター。自分の分身として、バーチャルコミュニケーションの中（ネットワークゲームやチャットルーム、掲示板などで利用する）。

濱田庸子（はまだ・ようこ）

環境情報学部助教兼政策メディア研究科委員  
医学博士／精神医学、精神分析学、自動思春期  
精神医学、乳幼児精神医学、学校精神保健など  
の研究を行なうほか、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに設置されている「SFC心身ウエルネスセンター」の所員として学生のメンタルヘルスも担当している。



ネットワークコミュニケーション

今回の特集では、デジタルキャンパスでの人間関係を形成し維持していく上で欠くことのできないネットワークコミュニケーションについて、SFCにおけるさまざまな取り組みが紹介されている。また、今回の特集は6年前のSFC REVIEW No.3 (1998)「特集・メディア・コミュニケーション」(当時は編集も体裁もいまとは違ったスタイルであるが)の「ふりかえり」として読むこともできる。それは、この6年間でほくたちをとりまく環境がどのように変わったのかを再確認し、その間のアイデアの深化や調査・研究の成果を問い直すということでもある。

社会科学系の研究では、パソコン通信のころから、コンピュータを介したコミュニケーション(Computer Mediated Communication:CMC)という領域がある。研究の動向を概観すると、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーション(Face-To-Face Communication:FTF)との比較をおこなうものが多くを占める。CMCでは顔が見えないため、相手の存在をさほど意識しなくなり、結果としては相手に対する社会的配慮を怠るようになりがちだという。社会的な手がかりが希薄であるために、じぶんの言動を抑制できなくなったり、敵対的な

関係が生まれやすくなったりするとの報告もある。その一方で、ネットワークを活用したブレインストーミングなどでは、匿名性が確保されることで開放感が生まれ、むしろCMCにおける非抑制的な言動が創造性を高めるという示唆もある。いずれにせよ、研究領域としてはまだまだ事例を積み重ねている段階だと言えるだろう。

目と目を合わせるFTFは、ひとつの理想である。だが、もはやCMCを無視することはできない。つまり問題は、両者をくらべて、どちらかを選ぶことではない。コミュニケーションの状況や相手との関係性のなかで、コミュニケーション・スタイルを使い分けたり、組み合わせたりすることが重要なのである。調査・研究にとつての課題はCMCとFTFを一体的に考えるということであり、一連の特集記事を読めば、そのためのさまざまな「実験」がすすめられていることがわかるだろう。

身体と場所を感じるコミュニケーション

じつはほくも、6年前のSFC REVIEWに「デジタルメディアが(私)をつくる」という文章を書いた。ネットワーク上での帰属意識やアイデンティティがもなテーマで、いま開講している「ネット

ワークコミュニケーション(ネコミニ)」(本号P.6-7)で取り扱っている内容と密接に関わっている。

読み返してみると、いくつか気になる点がある。(恥ずかしながら)当時は、ネットワークコミュニケーションにおける「ハンドルネーム」と「匿名」のちがいをきちんと区別していなかったように思う。顔が見えないという意味では、おなじ状況なのかもしれないが、「ハンドルネーム」は、確実に「名前」なのである。たとえディスプレイ上で明滅する文字だけが社会的な手がかりであったとしても、「名前」で呼び合う関係性が生まれれば、信頼感や安心感が醸成されるはずだ。当然のことながら、「名前」で呼び合う関係ならではのストレスや緊張感も生まれることになる。ここ数年で、ほくたちは、「匿名」ではない、もうひとつの「名前」とともに暮らすことに慣れてきた。そして、CMCとFTFとの行き来がひと頃にくらべてはるかに容易になり、いくつもの「名前」(当然のことながら、相手の「名前」も複数ある)を整理しながら、相手との関係性を理解するようになった。

この原稿を依頼される直前に、佐世保で事件が起きた。チャットでのやりとりが引き金となつて、小学生が同級生の命を奪うという衝撃的な事件だ。時間があれば、経過がもう少し明らかとなり、マスメディアの論調などをふまえて語ることができると

だが、この文章を書いている時点ではまだわからないことが多い。だが、「ネコミ」を担当していることもあり、この問題についてはいろいろと考えさせられた。いわゆる「テクノストレス」の問題はもちろんのこと、幼児期からVDT/LCDと接触しながら育つことが、身体や認知構造にどのような影響をあたえるかについては、専門的な調査・研究から学ばなくてはならない。

ここで触れておきたいのは、チャットなどのネットワークコミュニケーションは「リアル」かどうかという問題である。今回にかぎらず、ここ数年、ネットワークでのやりとりがきっかけとなっていくつかの事件が起きているが、そのたびに「リアル」と「バーチャル」をめぐる議論が展開される。「リアル」と「バーチャル」との区別がつかない、あるいはメディアによって増幅されたと感じる能力が暴走する、という論点である。結果として、CMCのネガティブな側面が際立つことになるようだ。だが、チャットでのやりとりが「本物ではない」ということではない。むしろ、チャットというコミュニケーションが「本物」であったということ、今回の事件が示しているのではないだろうか。

### ひとがメディアを拘束する

いまや、電子メールをはじめ、さまざまなコミュニケーション・スタイルが日常生活に浸透している。それは、明らかに身体や場所を感じさせるコミュニケーションである。たんに顔文字やウェブカメラで感じる身体性だけではない。フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションの予兆(あるいは余韻)となり、みずからの活動に直結しているという意味で、身体性を感じるのである。一通のメールで、ほくたちは動くのである。その動きが場をつくり、さらにはモノや環境をも変えてゆくことにつながる。メディアは、ほくたちにさまざまな影響をおよぼす。生活のリズムやスピード感、さらには身体感覚をも変容させる。とりわけSFCでは、さまざまな「社会実験」をおこなう環境が整っており(それに慣れすぎている感もあるが)、メディア(技術)のひとへの影響については、直接体験として感じることができる。「社会実験」においては、メディア(技術)が作り出す自由を、そして制約を体感することができる。忘れてはならないのは、ひととメディア(技術)との関係が相互構成的だという点である。メディア(技術)は、ほくたちが受容し、使うことによって、その(居場所)を獲得してゆく。つまり、メディア(技術)に自

由と制約をあたえるのは、ほくたちなのである。そう考えると、ほくたちが、メディア(技術)の潜在的な可能性を拘束しているのかもしれない。SFCが、さまざまな「社会実験」をすすめることをひとつの使命として担うとするならば、それらがすべて「リアル」であることを忘れてはならない。コミュニケーションは、いつでもリアルなのである。



加藤文俊(かとう・ふみとし)

環境情報学部助教授兼政策・メディア研究科委員

専門はコミュニケーション論、メディア論、社会調査法(とくに定性的分析手法)、ゲーミング・シミュレーション。カメラ付きケータイを用いた社会調査法の開発やコミュニケーション支援のためのカードゲームに関する研究などを行なう。著書に『ゲーミング・シミュレーション』『シリーズ・社会科学のフロンティア』第8巻日科技連(共著・1998)などがある。

# When I was young



25歳の時

## 奥田敦

あの教壇で、魅力のある講義をしている教員は、どんな人なのだろう。  
学生が教員と接触する機会は、あるようでいて実はなかなかない。  
しかし、そんな教員にも若かりし頃、学生だった時代があった。  
どのような学生時代を過ごし、その後の人生にどのような影響を与えたのか。  
この連載では、学生時代の体験を中心に、教員たちの人生のターニングポイントを探る。  
連載第12回目の今回は、奥田敦 総合政策学部助教授に話を聞いた。

つま先から擦り減る靴

高校時代はバレエボール一色の生活でした。ある時、監督に「ふくらはぎの筋肉を鍛えるために、寝る時以外は踵を地につけるな」と言われたんです。その日から、本当に四六時中つま先立ちで生活していました。大会を理由に、修学旅行を休むほど、熱中していました。

僕は浪人して大学に入ったんです。予備校へ行き始めたとき、自分には本当に知らないことが多いことを実感し、机に向き合う日々の中で、少しずつ勉強に興味を持ちました。断片でしかなかった知識と知識が自分の中で全部繋がる瞬間の快感に気づき、幅広く勉強できる場に自分を置きたかったので、法学部を志望しました。

1年後に晴れて入学した大学で、僕は「イスラーム世界」と出会うのです。

### 法学からイスラームの世界へ

しかし、最初からイスラームに興味を持っていただけではありません。大学ではさまざまな法を学びましたが、ヨーロッパの大陸法とイギリス法、中国法とインド法というように、世界の法をいくつかのグループに分けて比較する比較法学が面白いと思っていました。その一つとして、イスラーム法もちゃんと勉強しないと語れないと思います。勉強し始めたのがきっかけです。

それから考えを深め、やはりヨーロッパの文明はアラブ抜きには語れないし、アラブの世界がヨーロッパに大きな影響を与えたことは否めない。そこで、法律につ

いてはどうだったのかと興味を持ちました。ところが、アラブがヨーロッパの法に与えた影響の研究がほとんどなされていなかったので。普通ならば、そんな影響はもともとなしものなかなと思うのですが、僕はそう思わなかった。じゃあ僕がアラブ・イスラーム法からの影響を立証しようと思ひ、イスラームの世界へ入っていきました。

### 嫌いなものは「常識」

常識には根拠がないことも多いのに、皆が常識だと言うから従う。しかし、これはおかしいと僕は思うんですよ。世の中疑問はないという人もいるけれど、僕の気質には合いません。それに、世界を見渡せば、それぞれの文化圏ごとに常識は違う。そういうことも知らないで、自分たちの常識だけで、善し悪しを簡単に判断してしまうのは、やはりおかしい。自分の性格上、やたら正義感が強いせいか、「このままでは何も変わらない」「これは違うんじゃないか」と、どんなことに対しても疑問を抱いていました。そういう見方で、いつも勉強していたね。ただ、自分が違うと思っただけに對して、何がどう違って、どうだったら正しいのか、そのところに対する答えを探して勉強してきましたね。

### ひとつの法典を求めて、海を渡る

そういう観点で研究していると、ヨーロッパの法史研究にも「常識」があることに気付いたんです。とにかく固定観念に縛られている

ようなところがあって、12、3世紀に出来上がった法典にもアラブからの影響は無視できないはずなのに、自分たちの法律がアラブからの影響を受けているなんて考えたくもなかったようでした。ヨーロッパ文化はアラブの影響なんか受けてないし。しかし、それは違うのではないかと、と私は考えたんです。そこで、ヨーロッパの学説が持っていたその常識を、覆してみたいと思いました。

その時、ヨーロッパの中世文化史を代表する、アルフォンソ10世賢王というカステリアの王が13世紀の半ばに作った七部法典に出逢いました。ところが、日本でこの法典の具体的な研究がされてなかったんです。じゃあ、私はこれをやろうと決めたんです。しかし、肝心な法典の原本が日本になかった。そこで私は、ヨーロッパへ旅立ったんです。あの法典を求めて。

それが修士課程一年の頃です。ぼくはまず、出身大学の日本比較法研究所に以前客員で来たことがあり、その時幸いにも知己を得たドイツ人の先生に、アラブがイスラームに与えた影響を立証するための勉強をしていると手紙を書いたのです。すると、とにかくマックス・ブランクヨーロッパ法史研究所を訪ねてきなさいということでしたので、フランクフルトに行きました。そして研究の趣旨を伝えると、いい先生がいるからと新たに紹介され、南スペインのムルシアへ向かうことになりました。途中シチリアに寄ることも忘れずに。夜行列車に揺られて、ようやくムルシア到着。やっとこの法典を見つけたんです。同時に紹介してもらった先生にも会えたのが嬉しくてたまらなかつた。

まさにこの時、こんな幸運に巡り合って、自分はこの研究をやり続けていいんだな

と確信しました。

その先生のごところに、七部法典をつくったアルフォンソ10世の立法政策について、要約つきの文献目録のゲラがアメリカの学者から届いていました。先生は数百枚にも及ぶタイプ打ち原稿の束を渡すと、「ここにタイプライターがある。そして紙もある。思う存分メモを取っていきなさい」と言われたんです。一週間ほどすると、その先生が、滞在を3日くらい延ばせないかと尋ねてきたのです。実は、彼が中心になってアルフォンソ10世の立法についての国際学会が開催されるころだったのです。それに日本から来た研究者として出席してほしいと声をかけられたのです。当然、残って出席しました。幸運の連続に、本当に感激でいっぱいでした。

帰国してからまとめた「シエテ・パルティダスとローマ法」は両者を比較対照しながら、イスラーム法からの影響の可能性を探る論文です。その後数年して、研究の中心はイスラーム法へ移っていくのですが、研究に取り組む気持ちは今もあの頃のままです。

### 人類の将来を負っているのは、君たち

現在の日本の外交は、心ある関係者の必死の努力にもかかわらず、全体としてはさしたるヴィジョンもないまま、国際貢献の名のもとに、他国のエゴに振り回されているところがないでしょうか。そんな状況をすべて国益のひとことで説明されても、簡単には納得できません。考えてみれば、学生生活にも似たところがあります。まず培うべきは、確かなヴィジョンであって、社会や会社の論理に巻

き込まれる術ではないと思います。どうぞ巻き込まれ急がないでください。大学の4年間というのは、誰の指図も利益も気にすることなく勉強できる最高の贅沢な時間です。社会に嵌るための勉強は、社会に出れば否応なしです。だから、せめて大学にいる間は、自由な発想をもって、世界を見渡してほしい。そして、自分なりに、人類の将来にどう貢献できるか、国益や会社の利益を超えたところで何ができるかを考えてほしい。君たちはそれくらいの使命を負っている。君たちがやらなければ、他に誰ができるか。よい意味で、俗世間から隔離され、個性豊かな素晴らしい教員が揃い、日夜問わず安全に勉強できるキャンパスなんて、SFC以外世界中どこ探してもない。そういうところにいる今、人類の将来を負っているんだという姿勢で、自分の可能性を信じて、何事にも挑戦してほしい。

### 奥田 敦 (おくた・あつし)

総合政策学部助教兼政策・メディア研究科委員  
中央大学大学院法学研究科博士課程  
規定期間経過後退学(法学修士)。  
シリア国立アレppo大学アラブ伝統科学研究所客員研究員、同大学学術交流日本センター主幹などを経て現職。  
専門はイスラーム法およびその関連諸領域。イスラームの教えを軸にした人間・社会・法・文化に関わる総合的研究のほか、シリアを中心にアラブ・イスラーム圏との実践的な相互理解を目指す地域研究・文化交流を展開している。現在、NHKテレビ 短期集中講座 アラビア語入門に講師として出演中。





おちだ あつし

## 第11回 落田淳さん

株式会社 電通 第6営業局勤務  
1995年度 環境情報学部卒業

# デジタルメディアで 未来のメディアを切り開く

かつて「未来からの留学生」としてSFCで学んだ学生たちは、いま実際に未来を創り始めている。彼らはSFCで何を学び、今、何をしているのだろうか？この企画では、そんな卒業生に社会での奮闘の様子を聞くとともに、今後社会へ羽ばたくSFC生へのアドバイスなどを語ってもらう。今回はSFC2期生(1995年度環境情報学部卒業)で、株式会社電通第6営業局に勤務する落田淳さんにインタビューした。

「創る」だけの仕事じゃない

―落田さんは、どのようなお仕事をされているのでしょうか。

電通に移って4年目、さらに営業は今5月からなので、偉そうにインタビューに答えてよいのかどうか。あはは。広告代理店というと、広告をつくるイメージが強いと思いますが、それは全体の一部なんです。商品が売れるとか、会社のイメージがアップするとか、クライアント企業には各々目的があって、目的達成のために「コミュニケーション」という手段のプロとしてお手伝いするのが広告代理店の全体像です。

そして、その手段にはCM、電車の中吊り、イベントなどがあって、それらをチームワークで提案・実施するのが広告代理店です。職種で見ると、企業の担当者の相談相手となる営業や、広告をつくるクリエイティブ、売れる仕組みを考えるマーケター、TVや新聞やネットの会社とお付き合いするメディア担当など、複数の仕事が入っています。最近では企業の依頼も多岐にわたっているので、サッカー日本代表などを応援するスポーツ・マーケティングや、映画やDVDを製作するエンターテインメントの部署もあります。

私はこの中で、これまでマーケティングプランナーを3年担当していました。そして今年の5月から営業を担当していて、クライアントである携帯電話会社が業界内で生き残っていくための戦略を、

クライアント様と一緒に考える仕事をしています。

―落田さんの目には、現在の広告業界はどのように映っていますか。

今までの広告代理店の仕事をこなしつつ、これからの新しい仕組みもつくっていく段階なので、「楽」ではありませんが「楽しい」仕事です。従来の広告の仕事に加えて、コンサルタントのようにクライアントと一緒に戦略を考えたり、新しいメディアの立ち上げを行ったりと、やるうと思えば企画立案から実施・評価まですべてに携われます。こんなにおもしろい業界はないんじゃないですか。

―仕事で苦労したことは何ですか。

苦労というよりは一番気を使うところですが、クライアント企業自身が開発した商品やサービスに対する思い入れと、一般の生活者がそれらを知ったり買ったりする気持ちには、最初は隔たりがあるものなんです。開発した側の熱意や愛情が、生活者に受け容れられるように、間に入る広告代理店が企業も生活者もハッピーになれるシナリオをつくることをここがけています。

デジタルメディアを創りたい

―落田さんが広告業界を目指した理由を教えてください。

学生の頃から先取りするのが好きでした。おもしろくて新しいことを他人が先にやると、悔しくて仕方がなかった。だから、就職活動の時も最先端の世界に携わりたいと思っていました。そこで考えたのは、今後、インターネットや携帯電話自体がメディアになるなど。当時は、携帯電話黎明期で形状もノートパソコンより大きかったんですが、鶴野先生（※注1）が携帯電話をお持ちだったのを横目で見ながら、これが将来小さくなってみんなが持つようになったら、などと思いついた。デジタルメディアを立ち上げる仕事かしたいと考えていました。

そこで行き着いたのが2つのスキルの重要性です。1つは、ITとデジタルメディアの知識とスキル。もう1つは、メディア・ビジネスに関するノウハウでした。そんな思いから就職したい会社は電通とIBMに絞られていったのですが、ITスキルを身につけながら新しい仕組みに取り組むべく、IBMに入社しました。

—電通に転職された理由は何ですか。

IBMでは最先端の仕事をする事ができて、社会人としての基礎も身につけることができたので本当にお世話になりました。ITを経営戦略や情報戦略に利用するeビジネスの立ち上げやコンサルティングを担当できただけでなく、金融機関の統合や、企業にオンラインサービスを提供したり、エンターテインメントサイトを作ったりと、ネットワーク・インフラ関連の技術とビジネスに貢献する

解決策の提案の仕方を学べたのは今でも役に立っています。

ですが、6年間働いた時点で、IBMという手段のプロの道を進んでいくのも悪くないけど、学生の時からやってみてかかったデジタルメディアの立ち上げに挑戦してみようと改めて思いました。考え抜いた末、マスメディアを中心に実力次第で最先端の仕事ができる電通に転職することにしました。

チームワークが大切

—成功談を聞かせてください。

成功談というと自慢話になりがちなので、クライアントから感謝された仕事という意味でお答えすると、月並みですがチームワークがうまく機能したときには、

広く浅く、  
でも1本軸を持っている、  
そんなT字型人間を  
目指してほしい。

結果としていい仕事になって感謝された気がします。企業には優秀な人材はたくさんいるので、役割分担と気持ちの共有ができることが大事な気がします。映画に例えれば、俳優だけすごいとか、監督だけ有名でもだめで、全体としてまともないとお客さんは感動しないって言われています。広告でも同じかなと。CMだけウケても、経営戦略の中での位置づけが曖昧だと商品が売れなかったりします。今は営業なので、人・モノ・カネを上手に仕切ってチームワークを生み出せるプロデューサーになることが目標です。まだまだですが。

全体を見つめる視点

—広告業界が求める人材像を教えてください。

広告・イベント・映画等、コミュニケーションに関するモノが大好きで、仕事を楽しめる人ですかね。そこで自分のオリジナルの軸があると、もっと楽しく仕事ができると思います。困ったときや未知の仕事の場合、自分のオリジナルの軸に沿って考えられるのは大きいと思います。

今私の軸はデジタルメディアですが、SFCには多種多様な軸のキッカケがありますよね。難しい話でなくてもよく、コスメが好きとか映画なら負けな気がしますが、好きなことなら何でもいい気がします。相模元学部長（※注2）の受け売りのような気がします。業界や業種を超えた幅広い知見と自分なりの軸を持った、アルフ

アベットという「T」字型人間が、楽しくステキな仕事をできるんじゃないですか？

—最後に、広告業界を目指すSFC生にアドバイスをお願いします。

広告は、手段であって目的ではありません。だから、コミュニケーションを通じて何を伝えたいのか、つまり、自分がやりたいことは何で、クライアントにどんなお手伝いができるのかをはっきりと持つことが大切だと思います。私の場合は、映画やスポーツが大好きで、携帯電話やブロードバンドでエンターテインメントコンテンツをつくれたら、毎日楽しく仕事できるという気持ちから始まっています。自分が好きなことと仕事が一致しているからこそ、汐留（※注3）の夜明けを会社で見てもがんばれます。給料やネームバリューなんかは置いて、好きなことで楽しく仕事ができる人なら、広告代理店の社員に向いていますよ。

※注1 鶴野野郎（うの きみお）

政策・メディア研究科教授兼総合政策学部教授 1941年生まれ。イリノイ大学にてMBAを取得。専攻は、政策分析、環境科学、国際関係など。SFCでは、マクロ経済Ⅱ、経済政策分析などを担当している。

※注2 相模秀夫（あいそ ひでお）

東京工科大学学長、慶應義塾大学名誉教授、工学博士

1990年より初代環境情報学部長、政策・メディア研究科委員長を務め、1999年慶應義塾大学名誉教授、同年東京工科大学初代メディア学部長を務め、その後学長に就任。

※注3 汐留（しおどめ）  
東京都港区の一地区。株式会社電通の本社がある。



SFC三田会の本格的組織作り ◀

HCD告知 ◀

SFC卒業生連携協議会からのお知らせ ◀



## キャンパスへ帰ろう

第9回

集え!「未来へ帰った留学生」たち

# みなさん、SFC三田会は、 みなさんの三田会ですよ!

SFC一期生の卒業と同時に発足した慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス三田会(以後:SFC三田会)は、本格的な組織作りに向けて、新しいスタートラインに立っている。その代表幹事を務める三期生の橋本岳さんにお話を聞いた。

「まず何よりも、死んでません。笑。そして、みなさんの三田会です。」

SFC三田会は、1994年3月に正式に発足した。毎年各期の卒業時に組織される年度三田会の学部代表が年度幹事となり、二学部・一研究科を統合する幹事会を構成するという形をとっている。他三田会と同様に学生時代で培った人的つながりを将来まで維持していくことを第一の目的としている。

しかし残念なことに、発足当時はよかったものの、年々卒業生の認知度が低下しているのが現状だ。「会費は払ったのに、SFC三田会は何してるんだろ?」と、卒業生に思われては困る。そのためにも、基盤のしっかりとした組織をつくるのが今一番重要と考えられている。

「とりあえず、SFC三田会で何かを企画するよりも、まずSFC三田会という組織をしっかりとつくる」。そして、「これまで前幹事代表である高橋寿佳氏一人に頼りすぎていた部分をみんなで担うようにし、組織として動けるようにする」。これが、自身の任期2年間の自分の使命だと橋本さんは話す。

### 「同窓会」のありかたとは

同窓会は、「何かの目標に向かって、みんなで一緒に走ろうとか、一致団結してがんばろうとか、そういう会ではないと思え」と語る橋本さんが目指そうとしている同窓会のありかたは、どういふものなのだろうか。例えば、卒業生が再びキャンパスに集まるイベント、第3回ホームカミングデイが

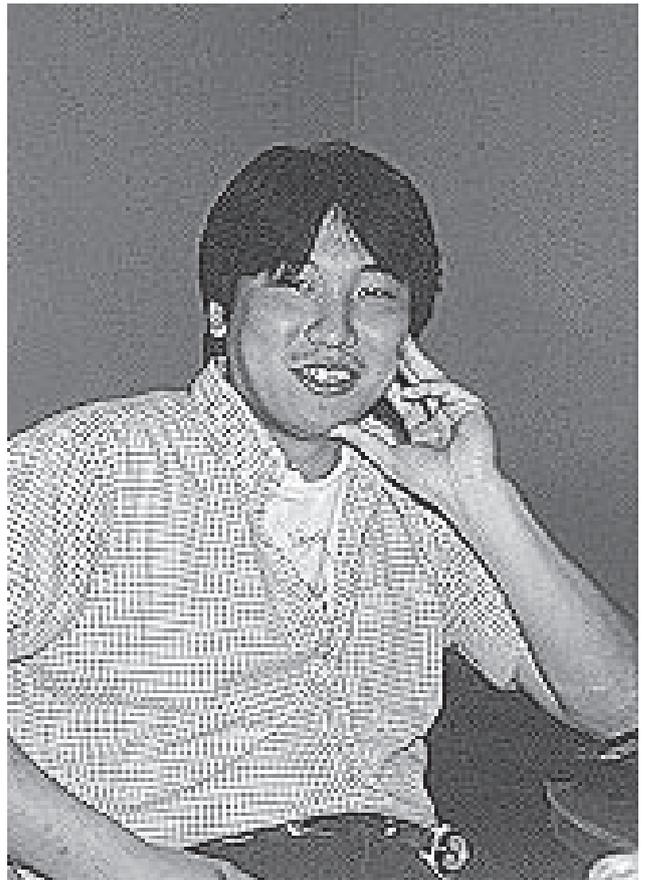
10月16日に開催される。今年は、秋祭と同時間催すこともあり、例年より多くの人が集まる事が予想される。「一人でも多くの人に来てもらうこと。集まる場・環境を提供すること。きつとそこから何かが生まれる。それが大事」と幹事の一人でもある橋本さんは考える。たかさんの人が集まれば、新しく何かが起こるはず。スポーツに例えるなら、「ただ、集まって試合の観衆になるのではなく、今まで知らなかった人も出会って、一緒になにか新しいゲームを生み出そう」ということだ。これが橋本さんの考える同窓会のあるべき姿なのだ。

### 他大学にも驚かれる三田会の「強い絆」

社会に出ると、「慶應義塾大学の三田会」は強い絆で結ばれていることに気づく。慶應OB・OGの人に出会ったときの第一声は「何学部の何年卒ですか?」「〇〇さんをご存知ですか?」だ。そして、そこからお互いの知り合いを探し、相手が自分の知り合いの知り合いであることを認識することも多いという。「慶應の出身というだけで、少し安心できる人だなと思ってしまう雰囲気や慶應にはある」と橋本さんは言う。内部のものには当たり前感じられる、こういうOB・OG間のつながりが、実は他の大学の人からは「慶應の人の付き合いがすごい」と思われているようだ。

### SFC三田会の目指すところ

SFC三田会の目標、それは、「SFC三田会ってすごいよね」といわれることなく、「SFCのOB・OGって、すごい



よね」と周囲から思われるような組織であること。また、困難にぶつかったときにSFC三田会のつながりを頼りにした。という話を多く聞けるような組織であることだ。

今号が出る頃には完成している予定だが、三田会のWEBサイト(<http://www.mitakai.sfc.keio.ac.jp/>)では、お知らせだけでなく、住所/メールアドレス変更の手続きが行なえるようにもなる。「確実に卒業生に郵便物が届くというのは、実は素晴らしいこと」だそうで、データベースの管理なども、今後一層の整備を進める計画だ。

どんなプロジェクトにもいえることだが、誰かがやってくれればいいなど全員が思っているうちは、何も始まらない。実際に誰かが動き出して初めて、事は始まるのだ。SFC三田会でも、原動力となるような人

を常に募集中であるという。

### 今後の課題

目の前には課題が山ほどある。

1つ目に、幹事選びの難しさが挙げられる。クラスでの授業が一年生の春学期が過ぎると少なくなるSFCでは、「クラス幹事」の選出が難しく、卒業する前に、どこから幹事を選出するかが曖昧なのだ。卒業する以前に、SFC三田会の存在を在校生に認識してもらうことも、大事な一歩だ。

2つ目に挙げられることは、卒業後にSFC三田会の活動に時間を割ける人が少ないこと。卒業生は皆社会で活躍しているわけで、時間には限りがある。他キャンパスと比べてSFCの卒業生は、会社勤めの人が多く自営業者が少ないため、三田会の

活動がなかなか活発にならない原因のひとつだといえる。

年会費の回収率があまりよくないことも指摘しなければならないが、この原因は認知度の低さにあるという。SFCの教職員・事務の方との連携を大切にして今後の広報・活動内容を充実させ、SFC三田会の存在を周知させていく予定だ。

### 「在学中になにかをやり尽くせ」

在校生に向けて、力強いメッセージをいただいた。「何かをやるっていうのは、人それぞれだと思うから、学生時代は好きなことをやればいいと思う。ただ、こんなに自由に時間を使えるときは今しかないから、ぜひそのことを思いっきりやり尽くしてほしい。そして、卒業したらSFC三田会の活動に加わってくださいね。」

一方、卒業生へのメッセージは次のとおり。「みなさんのSFC三田会です！ご賛同いただければぜひ会費をお納めください。そして、ホームカミングデイには足を運んでください。懐かしい仲間会いに行きましょう！地下鉄もできて、昔よりずっと便利になっていますので。笑」



橋本岳

平成8年環境情報学部卒、平成10年政策・メディア研究科修士課程修了。同年(株)三菱総合研究所入社、現在に至る。専門はインターネットを利用した住民参加、電子自治体、IPv6の普及。平成15年度よりSFC三田会代表幹事。

### SFC卒業生連携協議会からのお知らせ

オフィシャルWebサイトを2004年春、大きくリニューアル・バージョンアップすることとなりました。会員情報の更新(住所変更や連絡先変更など)や各種問合せに関しましては、以下のアドレスまでメールにてご連絡下さい。

SFC卒業生連携協議会  
sfc-mitakai@sfc.keio.ac.jp

HCD2004 10月16日

今年は、秋祭と同時開催！  
みんなが集まればなにかが起こる！



# 異国の風

## สายลมในต่างแดน

### 第8回 タイ王国 新たな看護医療との遭遇

キャンパスを飛び出すSFC生は多い。この企画では、外国を訪れたSFC生に焦点をあて、その活動や彼らの経験をお伝えする。今回は、タイのエイズホスピスで医療ボランティアを行なってきた看護医療学部の国際協力研究会 (PEACE) の活動をお届けする。

毎日人が亡くなる環境

―タイでの活動を教えてください。

私たちが活動していたエイズホスピスには、HIVに感染している患者、既にエイズを発症している患者、そして、死を目前にした患者などがいて、その方たちの症状はさまざまでした。私たちは、そうした患者さんの体をふいたり、おむつを換えたり、話し相手になったりしました。痛みやむくみをとったり、血液やリンパの流れをよくするためのマッサージも欠かせませんでした。また、亡くなった患者さんには、鼻に綿を詰めるなど、死後のケアも行ないました。

―エイズホスピスとは、どのような場所なのですか？

エイズに罹った人が最期を過ごす場所です。毎日、2〜3人の患者さんが亡くなります。病院だと、病気の根治を目的にしていますが、ホスピスでは、「患者さんが尊厳をもって死を迎えられるようにする」のが最大の目的なのです。だから、そうしたホスピスの性質上、人の死に立ち会う機会は多かったです。初めのうちには、人の死を眼前にして、暗い気持ちになる日々が続きました。けれど、患者さんは明るく、死を当然のものとして受け入れている方が多かったのです。というの、タイは仏教国なので、死後、生まれ変わるといふ輪廻転生を信じてい

る人が多いんですね。「死」を自然に受け入れる雰囲気があったように思います。日本とタイでは、「死」についての思想や文化が違うんだなと思いました。



ホスピスの正面にて

―毎日、人の死を目の当たりにしてどのように感じましたか？

患者さんのなかには、死期を察している方もいました。けれど、そういう状態でも、最期まで頑張って生きようという意志を持っている患者さんがいました。そういう患者さんに近づくと、生きたいという意志が自然に伝わってくるんです。そして、声をかけてあげると、「マッサージが気持ちよかった」とか「あなたののおかげで生きられてるんだよ」とか、生きているだけで精一杯なはずなのに、優しい言葉をかけてくれるんです。死を目前にしている患者さんからの言葉に、うれしさと悲しさを感じました。

患者さんとの関係

―エイズ病棟で活動して、不安はありませんでしたか？

たしかに、最初は恐怖感がありました。私たちはHIVの正しい知識を大学の授業や勉強会などを通して学んでいたのですが、患者さんの血液や体液と接触がなければ感染しないということを知っていたのですが…。しかし、日々患者さんと接していく中で、言葉は通じませんが、患者さんの体に触れ、体温を感じることが、「同じ人間じゃん」という思いが生まれ、患者さんというよりは友達として接していたような気がしました。

日本にいた時は、「私は患者さんに何をさせてあげられるか」ということばかりを考えていました。しかし、タイに行ってから、「患者さんにしてもらうこと」



散歩中の様子

も考えるようになったのです。大切なのは、一方的な医療の提供ではなく、お互いを思いやる関係を築くことだと感じました。



マッサージの様子

—大学で勉強したことは役立ちましたか？

たしかに、大学で学んだHIVの知識やおむつ交換などの実践的な技術は役立ちました。ただ、実際にホスピスで患者さんのケアをしてみると、一般的なHIVの知識やケアの技術に加え、タイの文化や患者さんの人生観なども含めて患者さんと接することが大切なんだと思いました。このことは、将来私たちが看護師として臨床の現場で患者さんのケアにあたる時にとっても重要になると思います。学生のうちに、この点を学べたことは本当によかったと思います。



ホスピスの裏山からの風景

正確なHIV教育を

—タイでは、HIVへの偏見がありましたか？

ありました。本来、ホスピスには自ら志願して行くものなのですが、タイの場合は、HIVへの偏見から、患者さんは家族からも社会からも見捨てられ、仕方が無いからホスピスに来るケースが多いんですね。これは、教育の問題でもあると思います。エイズは怖いとか、エイズになったら死ぬとか、単に怖さを植えつけているだけのHIV教育が多いと思います。そうすると、HIVの人は関わらないようにしようという、HIVへの偏見が生まれてくるんです。

タイのエイズホスピスには、毎日社会科見学の学生たちが訪れます。ところが、

病室に入ろうとしなかったり、入っても手で口を押さえたり、患者さんに話しかけられても無視したりする子供が多いのです。あのままでは、HIVへの偏見は増すばかりだと思います。正しいHIV教育が必要だと強く感じました。



患者さんとコミュニケーションしている様子

研修を終えて

国際協力研究会二〇〇三年度代表岩本恵

HIVの感染ルートは、大部分は性交渉と、注射器や針の使いまわしである。その他には輸血や母子感染がある。HIVにはいつも「セックス」や「ドラッグ」といった言葉が付きまとい、感染者は社会の中でさまざまな差別、偏見にあっている。しかし、タイでは貧困のゆえに売春せざるをえなかった女性もいる。多くの感染者は社会の犠牲者と言えるのではないだろうか。また、HIVの話はタブーとされる傾向にあるため、HIVに関する正しい知識を持たない人も多い。「HIV感染＝死」と考える人や、手をつないで感染すると信じる人がいる。HIVは感染を防ぐことのできる病気である(例えば性交渉においてはコンドームの装着により)。そして、たとえHIVに感染しても、薬によって体調をコントロールすることができる。実際に、薬によって身体の調子がよくなって、ホスピスから退院していった患者もいた。HIV感染のマイナスの側面ばかりではなく、HIVと共存し、元気に生きている患者もいるのだ、という側面をも、みんなに知ってもらいたい。私たちは今回のエイズホスピスでの体験を少しでも多くの人に発信するつもりだ。HIVという病気、そして感染患者のありのままの姿を見てもらいたい。そうすれば、HIVへの差別、偏見は減ると私たちは信じている。

# 岐路における意思決定



慶應義塾大学経済学部教授  
金融庁金融研究研修センター長

## 鈴木康之 × 吉野直行

総合政策学部4年

夢を抱く学生と、その目標とする人物との出会いの場を提供する「シリーズ対談」。5回目となる今回は、現在、金融庁金融研究研修センター長としても活躍している慶應義塾大学経済学部の吉野直行教授と、総合政策学部4年の鈴木康之さんの対談をお届けする。

あの日から、半年後の今。

鈴木：総合政策学部4年の鈴木康之と申します。私は、これまで竹中平蔵研究会(※1)をはじめとする研究会で、財政と金融政策を勉強してきました。現在は、小坂弘行研究会(※2)で財政マクロモデルを作っています。また、「ISFJ」(※3)では、僕にとって一番のライバルであった吉野先生のゼミ生とも競い合わせていただいたことがあります。

総合政策学部では、都市政策や安全保障など、いろいろな政策を提案しているのですが、実は税源や財源に関する問題を取り扱っているところがありません。例えば、国際政治をやっている人が、「ODAを増額しろ」と主張している。「じゃあその税源どうするの?」と言うと、「消費税を上げればいい」と言う。「じゃあ消費税を2%上げるとどういう風なことが起こるのか」と言うと、意外としつかりつきつめていない。こういったことが自分の中で違和感として残りまして、「それなら、僕が財政学をやってみよう」というのが、研究を始めたそもそものきっかけです。

財政を勉強していく中で、吉野先生の公共投資の経済効果についての論文に出会い、それがきっかけで、先生の研究に興味を抱くようになりました。実は先生にお会いするのは、今日を含めて3回目です。1回目は、「ISFJ」で先生がコメントされている時で、2回目は、日本財政学会に僕がめぐりこんだときです(笑)。ぜひ先生とお話したいと思ひ、めぐりこんだのですが、その時の発表のレベルの高さにたじろぎ、「これは出直し

てこなくてはいけない」と思い、その時は帰ったのです。あの日から半年後の今、こうして先生とお話できるチャンスに恵まれて、とても不思議な気持ちです。

ところで、今回の対談は、「岐路における意思決定」というテーマです。先生は東北大学を卒業後、海外の大学院へ行かれたんですよね?僕は、つい先日、大学院へ行く決意が固まらないまま就職活動をしてしまい、せっかく決まった内定を断る、という後輩に迷惑をかけるような行為をとってしまったのです。それだけに、先生が大学院を迷わず選ばれた姿勢には驚かされます。

吉野：僕はとにかく研究がしたかったので、研究者になることに迷いはなかったですね。

鈴木：学者になることは、大学入学前から決意されていたんでしょうか?

吉野：いえ、そういうわけではありません。学部時代に研究活動に惹かれ、アメリカの大学院で挑戦してみたいと考えました。アメリカでは、サッチャーのアドバイザーを務めていたアラン・ウォルターズ(※4)が、私の指導教授でした。彼はもともとLondon School of Economics(※5)にいて、私を指導している時期にも、サッチャーにアドバイザーをしていました。つい先日ロンドンでお会いしたのですが、今もなお、ヨーロッパのEuropean Monetary Unionに反対するなど、精力的に活動しています。

鈴木：それはどういった理由で反対されて

いるんですか？

吉野：European Monetary Unionが上手く行くはずがないからです。理論的には、全ての国が同じ経済構造をしていないといけないのですが、そうはなっていない。「これから大きなショックが起こったときに、European Monetary Unionは必ず崩壊する」これがウォルターズの考え方ですね。

鈴木：吉野先生は円の国際化について、発言されていますよね。

吉野：うん。ただ、円の国際化に関する問題とEuropean Monetary Unionのような共通通貨に関する問題は別です。円の国際化とは、円がもっと使われるようにしようという考え方。アジアで共通通貨をつくることとは違います。私は、アジアにはむしろバスケット通貨制をした方がいいと思っています。バスケット通貨制というのは、例えば中国であれば、ユーロや円や他の通貨にあるウエイトをつけて、為替をコントロールしていくというものです。

鈴木：先生が円の国際化に関する問題などについて考えるようにおなりになったのは、やはり学部時代に、金の流れや金融のハイパワードマネー(※6)関係を調査されていたからですか？

吉野：そうですね。大学院でも継続して、そういった勉強をしてきました。私が進路選択で一番悩んだのは、大学院卒業後かな。就職か研究者か、随分迷ったね。私はけっこう

IMF(※7)に行きたかったのですよ。しかし、ウォルターズがIMFや世界銀行は、日本経済があまり強くないから、日本人がその中に入っても出世できず、大変だろうと言ってくれたんですよ。だから、私はニューヨーク州立大学の助教授になったんです。その後、日本経済が成長しちゃったから、IMFか世銀に行った方が良かったのかも、しれないけれどね(笑)。

鈴木：先生の論文を読ませていただいたのですが、自分には考えもつかないような長期的な視点で、論理が展開されているのに驚きました。先生は、大学院卒業という人生の岐路においても、先の先のことを考えて、学者の道を選ばれたのでしょうか。

吉野：いや、そこまでは分かりませんでした。私は、ニューヨーク州立大の助教授になりましたが、実は他大学からも声がかかっていました。アメリカでは、教授になりたい場合には、まずその大学のセミナーに行き、セミナー後に、その大学の人と話す機会を持つようにします。そうして実際の会話の中で、「自分がこのカルチャーに合っているか」そして「自分を評価してくれるいちばんの場所か」を探るのです。現場を見る、というの是非常に重要なことだと思います。

過去に、私のゼミの中から同じ就職先へ行った2人の学生がいました。片方の人が学問的には優秀でした。ところが、営業に向いていたのは、もう片方のバイタリティーある人だったんですね。だから、大学内での成績は、その分野に適しているかどうかを表しているとは限らないのです。学

問の出来不出来はその人のある側面であって、社会は、学問とは関係のないところで動いているところが多いわけですね。就職の場合、いろいろな選択肢を考慮しておいて、そこへ実際に出向いて、これだと思える場所をみつつけることですね。

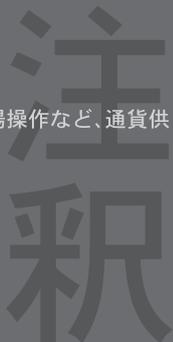
どんなところでも、元気な人

鈴木：なるほど……。選択肢の多さっていうのは、やはりそれまで積み重ねてきたものの多さに比例しますよね。

吉野：うんうん。けれども、学部での勉強はたったの4年間だからね。最も重要なことは「自分で考えられること。高校が「与えら

れたものを勉強する」場であるのに対して、大学は「自分で考えられる力を身につける」場ですね。

自分の選んだ環境で、思いつく限りのことをやれば、その人の4年間は価値あるものと言えるでしょう。これを達成できた人は、就職をして、どの部署に配属されても、そこにあるものを最大限に吸収できる人間になれると思います。逆に、大学で価値ある4年間を過ごせなかった人は、社会に出ても、与えられたものの最大でも80%くらいしか自分のモノにできない。官庁でも民間企業でも、どんなところでも「元気な人」になっているんです。場所を選ばず「その場所をどう改革したらいいか」という発想ができる人ですね。でも、「ダメな人」にはそういう発想が生まれてこない。これは、ほんのちよつとの違いですが、明らかです。



1 竹中平蔵研究会

慶應義塾大学SFCの研究会(ゼミ)。竹中教授が大臣就任後、学生主体で運営されている。財政金融政策など、マクロ経済を計量的に分析している。

2 小坂弘行研究会

慶應義塾大学SFCの研究会(ゼミ)。日本経済の実証分析、マクロモデルを研究している。

3 ISFJ

日本政策学生会議。関東関西合わせて6大学10ゼミによって運営される、非営利の政策シンクタンク。

4 アラン・ウォルターズ

サッチャーの経済顧問。イギリスの経済回復にその手腕を発揮した。

5 London School of Economics

イギリスを代表する、経済専門の大学。

6 ハイパワードマネー

現金通貨と銀行の預金準備の合計。日本銀行が公開市場操作など、通貨供給量に影響を与える際に重要になってくるもの。

7 IMF

International Monetary Fund. 国際通貨基金。

# 吉野 直行

なほゆき

1950年、東京生まれ。東北大学経済学部及び同大学院経済学修士課程を終了後、アメリカへ渡る。ジョンズ・ホプキンス大学経済学部にてPh.D(経済学博士)を取得する。1979年〜81年までニューヨーク州立大学経済学部助教授を務めた後に日本へ帰国。

現在は慶應義塾大学経済学部教授、預金保険機構運営委員、財政制度審議会委員、外国為替審議会委員、金融庁金融研修センター長として幅広く活躍中。



鈴木：吉野先生の集中力はどこからくるんでしょう？

吉野：どこからだろうね(笑)。ただ、私には3つの原則があります。これを守ることで、物事に真摯に向き合っているのかもしれない。

一つ目は、「自分の良さとは何だろうか、そしてそれを活かせる場所はどこだろうか？」と自問自答し続けること。

二つ目は、「素直であって頑固である」と。これは間違いなく、えらくなる秘訣！ある程度素直で、吸収すべきところはする。そして、上司や先生が言っていることに疑問を持った時には反論する。そこは頑固にならなくてはいけない。けれども、いろいろな屁理屈をつけて反論するのは、無駄な抵抗。そういうのが一番良くない。素直さと頑固さの使い分けを上手くなってほしいね！

三つ目は、「無駄なケンカをしないこと。少し二つ目に似ているんだけどね。例えば、今、ある2つの銀行が合併して、内部で一生懸命ケンカをしている。そういうのが一番バカなんです。だって本当はその銀行が戦わなくてはいけないのは他の外資系の銀行といった他銀行でしょう？ 組織内でもめていたら外への勝ち目はないですよ。だから、同じサークル、同じグループになったら、必要なケンカはしていなければならない。互いの足をひっぱるようなケンカをする組織はだめだね。そういうことを日本中の人がいろいろなところで考えていけば、日本の社会は強くなると思う。それが日本の銀行の一部ではできていないから、弱い。そう思います。

## 『100%+α』という精神

吉野：それから最後にもうひとつ。出世する人はね、自分の仕事を愛しています。どんな人でも。例えば、いろいろな銀行の頭取と話をしていると、「自分は銀行マンになって良かった」と言います。仕事に生きがいを感じていない人は、だんだんダメになっていきますね。

というのも、上司の立場になって考えてみるとわかります。嫌々入ってきた部下には仕事を頼みたくないじゃないですか。「あいつは俺のところに欲しい」と言われるような人にならないといけないんですよ。ポイント、上司に言われたことに対して、プラスアルファ多くして返すこと。つまり上司が「これをしなさい」として仕事をまわしてきたら、それに対して100%答える。しかし、上司も気が付かなかったことを何か少し加えて返すのです。それを繰り返していけば、上司は、「お、こいつなかなか良い視点を持っているな」と考えるでしょう。

それからもう一つ、ある金融機関の話ですが、出世しない人が集まるような支店があったのです。その支店長に任命された人は「俺もいよいよだめか…」と思う人ばかりでした。しかし、全く気にせずに全力投球で仕事に望んだ人もいたのです。その結果、衰退気味だったその支店を盛り返した！そうして悠々と出世組に戻っていったんです。こういうふうに、人生には挽回の可能性があります。「人生は、マラソンである」という言葉があるでしょう？ ただマラソンって良く見れば分かるように、30kmくらい

## 「対談を終えて」 吉野 直行

インタビュアーでは、学生が、どういう勉強をすればよいかとか、就職の問題など、不安を抱えていることが分かりました。どんな立場になっても、将来がどうなるかという不安に駆られることが多いと思います。毎日の生活で出来る限りのことを続けることが、将来にも結びつくということを忘れてはならないと思います。着実に大学で学べることを学んでいけば、卒業後に「もっと勉強しておけばよかった」という気持ちにもなりません。現状で出来ることをしっかりと行なってください。





すずき みちのぶ

## 鈴木康之 総合政策学部4年

独学で財政学を学び、竹中平蔵研究室を代表して参加したISFJ2003 財政分科会において最優秀論文賞を受賞。単著であるにもかかわらず、全分科会(20大学43ゼミ62論文)の中で最高得点を獲得するという快挙を成し遂げる。また、その功績が評価され「SFC Student Award 2003」を受賞。研究領域は経済学にとどまらず、さまざまな雑誌にエッセイ等を寄稿している。現在の研究領域は、「財政マクロモデルによる税源移譲のシミュレーション分析」(資本所得課税と経済成長)など。

## profile

からどんどん脱落していくよね。そして1回のマラソンはすぐ終わってしまう。けど人生では、あのマラソンゲームに何十回も挑戦できるわけです。

鈴木…確かに！

吉野…一度失敗して悪い支店に配属されても、与えられた環境のなかで企業全体に対する収益アップを図れば評価されるわけですよ。そうするとまた自分の希望が叶えられて、好きなところへ行ける。

鈴木…悪いからこそ良くしやすいという考え方をすればいいですね。

## どんな環境でも…

吉野…そうそう。切り替えが出来るかにかかっているよね。授業もそれと同じ。つまらないからって、隣の友人とおしゃべりしていたら何も成長しない。この授業の先生の話は難しいと愚痴を言ったところで、社会に出たら、「ビジネス相手の話が分からない」なんてよくあることなのです。生まれつき説明下手な人もいるしね。ホンダが事業を起こした時のエピソードは、「存じますか？

鈴木…いいえ。

吉野…ホンダははじめ、埼玉銀行に融資を求めに行ったのですが、ホンダはまだ中小企業ですから、銀行の担当者は真剣に耳を

傾けなかった。ところが、三菱銀行の支店長はこのホンダという中小企業は、お金貸せば将来成長しそうだと見抜いてお金を貸したんですよ。ホンダは今でも三菱から融資を受けているから、銀行の収益にも大きな貢献をしているのです。こうやってね、1人のビジネスが成功するかどうかは、彼に対応した1人が決めていると言っても過言ではない。

そうだとすると、分かりにくい授業の中からも、その人の言っていることを汲み取るうとする努力をすれば、将来のビジネスチャンスを増やすことに繋がるよね。つまり、その学生は、90分で相当なことを学んだことになるわけだ！

鈴木…僕は、どういったアプローチで財政に取り組むべきか決めかねていたのですが、今回の対談を通して、ヒントを得たような気がします。先生は、金融庁金融研究研修センター長として活躍されています。その反面、円の国際化の提言など、日本で批判されがちのもの良いところを指摘されていてバランスがとれていてすごいなあ、と思います。抵抗勢力を恐れずに「自分が本当にやりたいこと」と真摯に向き合っている先生の姿に、勇気付けられたような気がします。本日は本当にありがとうございます。

吉野…どんな環境に置かれても成長できる人間であることの大切さ、どうか忘れないうでください。

## 「対談を終えて」 鈴木康之

かつて、イギリス王立経済学会主催のパーティーで、ケインズは「文明ではなく、文明の可能性の担い手たる経済学者に乾杯。」という言葉述べた。芸術家・科学者・技術者が文明の担い手であるのに対し、経済学者の役割はあくまでも文明を育む土壌を用意することなのだ。つまり、財政金融政策の権威としてアカデミズムと実務の両面から政策決定にアプローチしていく吉野教授の姿勢は、まさに文明の可能性の担い手としての経済学者のあるべき姿と言える。

先生との対談は、私の学生生活における悲願であった。論文一本を仕上げるのに数ヶ月を要してしまう私にとって、先生がこれまで積み上げてきた研究業績はまさに感嘆の一言に尽きる。先生の論文執筆ペースの速さは他に類を見ない。にもかかわらず、論文それぞれのクオリティは非常に高い水準を維持し続けているのだ。そんな憧れの先生から幅広い分野にわたってお話を聞くことができ、心から幸せに思うとともに、このような対談の機会を設けてくださったSFC REVIEWの皆様には深く感謝したい。

先生は対談の最後に、「君たち若い世代が未来を創る」と強調されていた。その時、16世紀フランスの国家学者ボダンが残した「人間こそ唯一の富である」という言葉をふと思いつき、若者であることに甘えている自分に気付かされた。ピリオドではなくエポックとしての現代に生きる者として、先生の言葉を真摯に受け止めながら、今後の研究につなげていこうと思った。

# もしもし、こちから看護医療学部です！



思いがけず、研究プロジェクト（SFCにおけるゼミナール）でリーダーになってしまいました。今まで人の上に立った経験なんてないので、とても不安です。何か、グループを動かすコツのようなものはありますか？

おやおや、大変ですね。私の研究分野とも少し絡めて、アドバイスしたいと思います。

人はいろいろな結びつきの中で生きているわけです。私一人ひとりが自分の持っている能力を最大限発揮できる状態がいちばん望ましいと思います。しかしグループの人間関係というものは、人の力を促進する効果もあれば、制限する効果もある。人間関係のストレスや規則による制限が、その人のよい部分を損なってしまうことも多いですね。リーダーの役割は、まずこういったグループ活動における個々人の環境に配慮することです。

あなたは、PM理論を知っていますか？

これは、リーダーの主な役割である、

Performance（課題の遂行）とMaintenance（グループの人間関係の維持）のふたつを表しています。例えば、企業のリーダーを考えてみましょう。もちろんPとMの両方を完璧にこなせるリーダーが最も企業に貢献します。しかし、Pだけが得意なリーダーとMだけが得意なリーダーの二人がいる場合、長期的にはどちらの方が企業に利益をもたらすと思いますか？ 実はグループの管理を得意とするリーダーのほうがより大きく貢献するんです。つまり、目標追求にひたすら向かうよりも、メンバーのメンタルな部分をフォローしたり、全体の関係性を良くするほうがグループの生産性は向上し、メンバーの満足度が高くなるというのです。

初対面の人ばかりで組むグループなら、ふつう最初に自己紹介をしますよ

ね。でも名前や出身地

くらいしか言えなくて会話が十分に弾まなかったりするところ、ちょっと面白くないですよ。そこで、工夫して何かゲームをしたりするんです。

例えば私は授業の最初に、自己紹介というのをやることがあります。これは、「ペアを作って相手の名前だけ聞いて、それだけの情報で相手がどういう人か想像し、みんなに伝えてください」というものです。そうすると自分が他の人にもどう

いうイメージで見られているのかわかるし、その想像が当たっているか、ずれていても、なぜそう思ったのかとか、どこを見てそう思ったのかとかを話し合っていく中で、お互いのことがもっとわかるようになるわけです。

従来の「看護師養成のためだけの看護学部」というイメージを根底から覆した、慶應義塾大学看護医療学部。本企画では、学生の相談や質問に対して、看護医療学部の教員からアドバイスをもらう。今回は、意思決定とストレスについて研究を進めている、増田真也助教授が答える。



うやうやあってある程度人間関係ができてから、グループが目標としている作業をやってもらうんです。初

対面の人間と一緒に動くというのは、想像以上に不安を感じるものですが、それは自分のことがどう

思われるのかとか、周囲の人たちがどういう人たちなのかかわからないといったことからくるものですから、その部分を上手い具合に解してあげましょう。

そして、これは私の研究分野でもあるのですが、意思決定とストレスの問題として考えてみましょう。私たちが生きていく上で、情報は常に明確だとは限りませんよね。例えば、自分の病気がこれからどうなっていくのか分からなかったりしたら、

不安になったり、ストレスを感じたりするでしょう。そのために、重要な決定事項について十分に考えることができなくなったり、他人にあたったりして関係を悪くしてしまうことにもなります。

ここで、こんなエピソードを紹介しましょう。ある山で吹雪に遭い、遭難してしまった人たちがいました。しかも地図を無くしてしまっただけという、絶望的な状況でも、たまたまある人のポケットの中に別の山の地図が入っていたんだそうです。本当は別の場所の地図なんて何の役にも立たないのに、みんなでその地図を本物だと思い込んでいて、その地図を見て助かるためのルートを考えるというのを続けていたら、グループはまとまり、最後まで協力しあっていたには全員が助かったのだそうです。たとえその見通しが全く見当

はずれだったとしても、見通しがないことで不安や混乱を感じてグループがばらばらになってしまったり、判断力が低下してしまうよりずっとましだということなのでしょうね。これをリーダーの役割に当てはめると、複雑で難しい課題がグループに与えられたら、メンバーの意見を聞きながら、その課題の一部だけであつてもどういう風に進めるか、とりあえずの方針を出すことが大事なのだと思います。その見通しが適切なものならもちろんその方が望ましいけれど別に間違つていても取り組んでいくなかで直していけばいいわけです。当座の目標がグループメンバーに共有されれば、ひとまずはみんなで一生懸命やろうという気にもなり、

作業を通じて人間関係も深まっていく。しかしやることがわからないままだと、グループの活動はいつまで経ってもスタートせず、そのためにグループとしての一体感も育たなくなってしまつて、そのうちに仕事や責任を他の人に押し付けたりするようになってしまいます。この方法は、グループの始めの段階でパフォーマンスを向上させたり、メンバーのモチベーションを維持したりするのに有効でしょう。それでは、研究プロジェクト頑張ってくださいね。応援しています。

# SFCのこれからを考える

第1回 若手教員に聞く 廣瀬陽子（総合政策学部専任講師）

## 「SFCに物申す！」

これまで幾度となく語られてきた「SFCらしさ」や「これからのSFC像」  
——それらを批判的にとらえ、SFCのこれから語るための新鮮な視点を提示する。  
第1回目はSFCの2期生で現在は専任講師の廣瀬陽子さんに自由に語っていただいた。



1991年に総合政策学部に入學してからは、まさにSFC一色の生活。研究室の灯りがついていれば、オフィスアワー（毎週1回、教員が個人研究室で学生の質問や個人的な指導、相談にあたる時間としてあらかじめ設定、公開されているもの）でなくてもドアをたたたくほど、教員と話すのが好きだった。学部卒業後は東京大学の大学院へ進んだが、どうしてもなじめず、SFCへの思いを熱くしていた。修士課程ではソ連外交を研究したが、博士課程に入ると、旧ソ連のアゼルバイジャン共和国を研究対象に選んだ。そこは、今なお、くすぶり続ける世界の民族紛争に興味を持つようになって見つけた小国。研究者が極端に少ないこの地域の専門家として担う役割は大変。そんな彼女が、大好きなSFCに教員として戻り、今、あらためてSFCと向き合っている。

【提案1】  
● 研究プロジェクトは  
1人1つで通年制に  
● 1、2年生には「基礎ゼミ」を

—SFCで教員として働くなかで、疑問にお感じになっていることを教えてください。

廣瀬 お互いに影響を与え合って活性化していく教員と学生の関係を理想としていますが、私はそれが最近、少し危うくなっていると感じています。というのも、私が学生の頃は、基本的に研究プロジェクト（SFCにおけるゼミナール）に入れるのは3年生以上で、そのうえ1人1つしか入れないという決まりでした。現行制度に文句を言っ

てちょっと申し訳ないんですけど、やっぱりその点は前のほうがよかったのではないかと思うんですね。今は意欲さえあれば1年生から研究プロジェクトに入れるし、

2年生からは2つ以上の研究プロジェクトに所属してもよいわけです。まずいな、と思うのは、そのせいで、研究プロジェクトの共同体意識が希薄になってしまうこと。本人としても、2つの研究プロジェクトに所属していると、どちらかが「メイン」でどちらかが「サブ」という意識になりがち。「サブ」の方には、ただ出席しているだけだったり、信じられないことですが、両方の研究プロジェクトに同じレポートを出してしまったりする学生もいます。

それから、半年ごとに研究プロジェクトを交えることができる制度もあまり好ましくないと思っています。半年で研究プロジェクトをやめられると、私も半端なことしか教えられなかったという不甲斐なさを感じますし、おそらく学生側も大して勉強にならないか、と感じているのではないかと思います。

—現行の制度は、まだ特に研究したいテーマが見つからないから、いろいろかじってみたい、という多くの学生の要望を反映しているともとれますよね？

廣瀬 いろいろなものをかじるのは一般の授業で十分ではないでしょうか。「テーマがまだ決まりません」と言っている間に半年で研究プロジェクトを出て行っちゃう学生には、こちらとしても刺激を与えにくいですね。

やっぱり、1年生から研究プロジェクトに入るの難しいことです。研究の基礎を知らないといけない。だから、つまらなくなつてやめてしまう。たとえば、他大学を見ると、3、4年生用の専門のゼミとは別に、研究する上での基礎を学ぶための「基礎ゼミ」を1、2年生のために設定している場合があります。SFCでも1、2年生はあまり研究の奥深くには踏み込まず、その

1年生から研究プロジェクトに入れるし、2年生からは2つ以上の研究プロジェクトに所属してもよいわけです。まずいな、と思うのは、そのせいで、研究プロジェクトの共同体意識が希薄になってしまうこと。本人としても、2つの研究プロジェクトに所属していると、どちらかが「メイン」でどちらかが「サブ」という意識になりがち。「サブ」の方には、ただ出席しているだけだったり、信じられないことですが、両方の研究プロジェクトに同じレポートを出してしまったりする学生もいます。

分野の基礎文献をどんどん読んでいくような「基礎ゼミ」を選ぶようにしたらどうかと思います。そうすれば、本格的な研究をするための3、4年生用ゼミというのが出てきて、どちらも充実すると思うのですが……。

#### 【提案2】

● 授業の対象学年をしぼろう

● 授業同士の体系を

もう少しはつきりさせよう

— 廣瀬さんが、SFCのカリキュラムを改革するとしたら、どのようにしますか？

廣瀬 たとえば、どの科目でも1年生から4年生まで、取れちゃうという制度。これが実は、教える側としては非常にやりやすい。学生による授業評価には真摯に対応していますが、どのレベルに照準を合わせて授業をすればいいのか分からないのです。だからある程度、この科目を取ったら次はこれが取れる、と体系立ててしまつてはどうでしょう？ というのも、私がSFCで学生として学んでいた頃はそうだったので。専門科目は原則として3年以上を対象に設定していただきます。

#### 【提案3】

● 学部は4年間は、決定的なテーマが

見つからなくてもいい

● 大学は研究プロジェクトを選びを

もっとサポートしよう

— SFCでは学生の自主性が尊重されていて、研究プロジェクトも授業も自由に選べます。でも、それだけに、「早く何かをやらなきゃいけない！」と焦つて、その焦りのゆえにさまざまよつてしまつていてる学生も少なくないように思います。これについては、どのようにお考えですか？

廣瀬 私が見ている印象では、いろいろなことをやりながら、それが一本筋の通つた志に結びついていてるタイプの学生さんも確かにいます。でもその志を大学4年間で実現することは相当難しい。大学での卒業制作は、まだ中間発表のようなもので、大学を出て大学院に進学したり社会に出たりして初めて結実するものなのです。ですから結局、多かれ少なかれ、大学の4年間というのはずつとさまざまよつていてる期間なんじゃないかと思うんですね。一つの方向を目標しながら道に迷う人もいれば、ほんとうにさまざまよつて途方に暮れる人もいます。だから、

特に研究プロジェクトの選択については、制度的に補つてあげられる仕組みを考えるべきでしょうね。今のシステムだけでは破綻しかなないという気がします。

#### 【提案4】

● 教員は自分が学生であつたなら、

何をしてほしいかを考え、

それを実践しよう

— 最後に、SFCをこれから共につくりあげていく同僚の教員の方々にメッセージはありますか？

廣瀬 他大学の大学院に行った結果、SFCは私を感じていた以上に、学生思いのキャンパスだということに気づきました。SFCには、教員と学生がわいわいがやがやつていてる雰囲気があるでしょう。教員と学生の距離がすごく近いんです。ところが、他大学では、学生が教授に面会を申し込んでも三週間後にやっと会つてもらえらるか、全然接点のない場合も珍しくないんですよ。たとえば、私が高学時代の友人に「学生からの質問メールがたくさん来ると言つと、「なんで学生にアドレスを教えるの？、そんなことしたら仕事にならないでしょ」って返されてしまう。一般的に日本の大学教員は今でも、自分の研究が第一

で、学生なんかの教育は二の次という意識を、ごく当たり前のようにつけて持っていることが多いんです。教員が学生に自分のメールアドレスを教えること自体がめずらしいことなのですね。教えたとしても、ゼミの学生で、そのなかでも大学院生がやつと教えてもらえらるといつた感じなんです。だから、大学院時代の恩師に、「きみは学生に同化しすぎている。ちゃんと一線を引かないと甘く見られるから、別の人種なんだ」という事を明確に伝えなきゃだめだ」と言われてしまうわけです。ところが私は、教員も学生も同じ人種だと思つていて、勿体ぶる気はさらさらない。むしろ、学生さんからも学びたいのです。SFCでは、教員同士もそうなんですが、教員と学生がかなり風通しのいい関係を営んでいますよね。そこを大切にしたいと思います。

メールアドレスの公開にせよ、「オフイスアワー」の制度にせよ、他大学では必ずしもまだ当然でないことが、SFCではすでに完全に定着しています。私は、それが学生にとって、どれだけうれしいことであるかを実感しているのです。他の教員の皆さんにも、ポジティブに、自分が学生だったらどうしてほしいかを想像して、それを実践してほしいな、と思います。



廣瀬 陽子

(ひろせ・ようこ)

総合政策学部専任講師／慶應義塾大学総合政策学部(1995年卒業)法学修士(東京大学)国連大学・秋野フェロー(アゼルバイジャン共和国：2000年1月(2001年3月))／専門は、国際政治、比較政治、政治発展論、南コーカサス地域研究／担当科目は、地域研究D、比較体制論、国際関係論、研究プロジェクト、大学院プロジェクト科目(近代日本、アジア、北太平洋とマルチメディアデータベース)

## 特集幹事

加藤 文俊 (環境情報学部助教授)

## 編集長・デスク

桂山 奈緒子 (総合政策学部2年)

## 副編集長

### 特集担当

関口 仁美 (環境情報学部2年)

### 連載担当

百谷 伶奈 (総合政策学部2年)

## 編集

### 特集

永野 孝 (総合政策学部4年)

安井 元規 (総合政策学部4年)

朝倉 麻衣 (総合政策学部2年)

桂山 奈緒子 (総合政策学部2年)

北澤 嘉英 (総合政策学部2年)

出口 香央里 (総合政策学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

### 時をこえて

百谷 伶奈 (総合政策学部2年)

三野 泰宏 (環境情報学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

豊田 直紀 (総合政策学部1年)

野口 諒子 (総合政策学部1年)

### When I was young

朝倉 麻衣 (総合政策学部2年)

百谷 伶奈 (総合政策学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

神谷 健 (総合政策学部1年)

### Co-net

吉田 賢一 (総合政策学部2年)

安井 元規 (総合政策学部4年)

朝倉 麻衣 (総合政策学部2年)

### キャンパスへ帰ろう

出口 香央里 (総合政策学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

神谷 健 (総合政策学部1年)

### 異国の風

吉田 賢一 (総合政策学部2年)

百谷 伶奈 (総合政策学部2年)

神谷 健 (総合政策学部1年)

中村 春菜 (環境情報学部1年)

野口 諒子 (総合政策学部1年)

### シリーズ対談

百谷 伶奈 (総合政策学部2年)

三野 泰宏 (環境情報学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

豊田 直紀 (総合政策学部1年)

### もしもし、こちら看護医療学部です!

関口 仁美 (環境情報学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

野口 諒子 (総合政策学部1年)

### SFCのこれからを考える

桂山 奈緒子 (総合政策学部2年)

小野 島茉莉 (総合政策学部1年)

## レイアウト

両角 未央 (環境情報学部4年)

普門 正浩 (環境情報学部4年)

三野 泰宏 (環境情報学部2年)

金安 双葉 (環境情報学部3年)

## 付録 模型

HAL-CURATION

(稲葉 佳之+坂口 祐)

## 湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW担当

堀 茂樹 (総合政策学部教授)

## 事務局

田坂 真美

## 編集後記

アメリカに留学した最初の年は、大学の「ミール・プラン」を購入した。一括してお金を払っておくと、学期中は、キャンパス内のカフェテリアで「食べ放題」になるというものだ。勝手がわからなかったのと、とりあえずは申し込んでみた。たしかに合理的で、食費を節約できるのだが、ほくよりもはるかに身体が大きいのにもアメフト選手のような学生たちが、じぶんの2倍も3倍もの量食べているのを目の当たりにした。食欲旺盛なのは、見ていて気持ちがいい。そもそも体格がちがうのだから、べつに騒ぐことでもない。でも、食事に行くたびに、じぶんの支払ったお金がひとの胃袋のなかに消えてゆくのを見るようで、ちょっと複雑な思いがした。「食べ放題」は、じぶんの身の丈はもちろんのこと、他のひとの食欲(および容積)を把握しておかないと、損した気分になることがある。

今号は、ネットワークコミュニケーションをテーマに特集を組んだ。特集幹事として関わり、ここ数年の動きをふりかえりながら、「つながり放題」がもたらす可能性や問題点について考えてみた。「つながり放題」も、じぶんのスタイルや、他のひととの関係性をきちんと理解しておかないと、中毒になったり、バランスをくずしたりする。ほくたちをとりまく環境は変化をつづけ、数年後は、またちがったキャンパスになっているはずだ。だが、環境は変わっても、ほくたちはいま変わらずコミュニケーションの楽しさや難しさと同じ向き合っているにちがいない。出会いに喜び、人間関係に悩む。一通のメールに、笑うことも泣くこともある。食欲と同じように、コミュニケーションへの欲求は尽きない。「つながり放題」は楽しい。そして、「つながり放題」はムスカシイ。実験するキャンパスがあたえてくれる「プラン」を大いに活用し、まずは「つながり放題」を味わってみよう。

特集幹事 加藤 文俊

KEIO SFC REVIEWは  
編集委員を募集しています。

雑誌記事の編集、レイアウト、校正、写真に興味のある方は一緒にKEIO SFC REVIEWを作りませんか?

WEB  <http://sfcreview.sfc.keio.ac.jp>

MAIL  [gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

2004年7月15日 発行

発行人 熊坂 賢次

発行所 慶應義塾大学 湘南藤沢学会  
〒252-0816 神奈川県 藤沢市遠藤5322  
Tel 0466-49-3437  
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>  
[gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

制作・印刷 株式会社ワキプリントピア  
〒252-0815 神奈川県 藤沢市石川4-3-19  
Tel 0466-87-5811  
Fax 0466-88-6560  
<http://www.printpia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。  
ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

2004年6月17日、SFC初代事務局長・元塾監局長・元総合政策学部教授で、2003年度末までは湘南藤沢学会 KEIO SFC REVIEW担当幹事でもあった孫福弘君が急逝されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

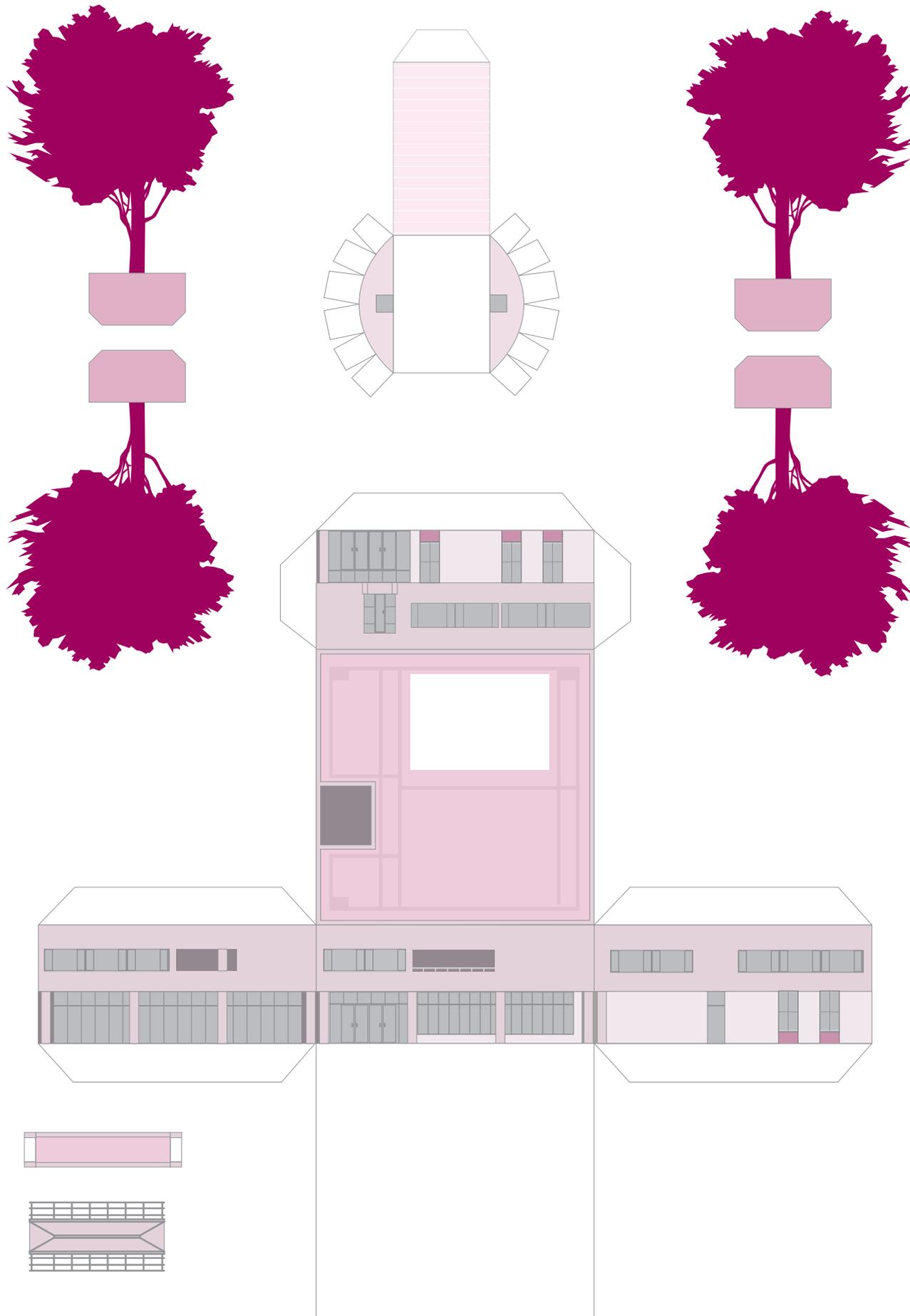
編集委員一同

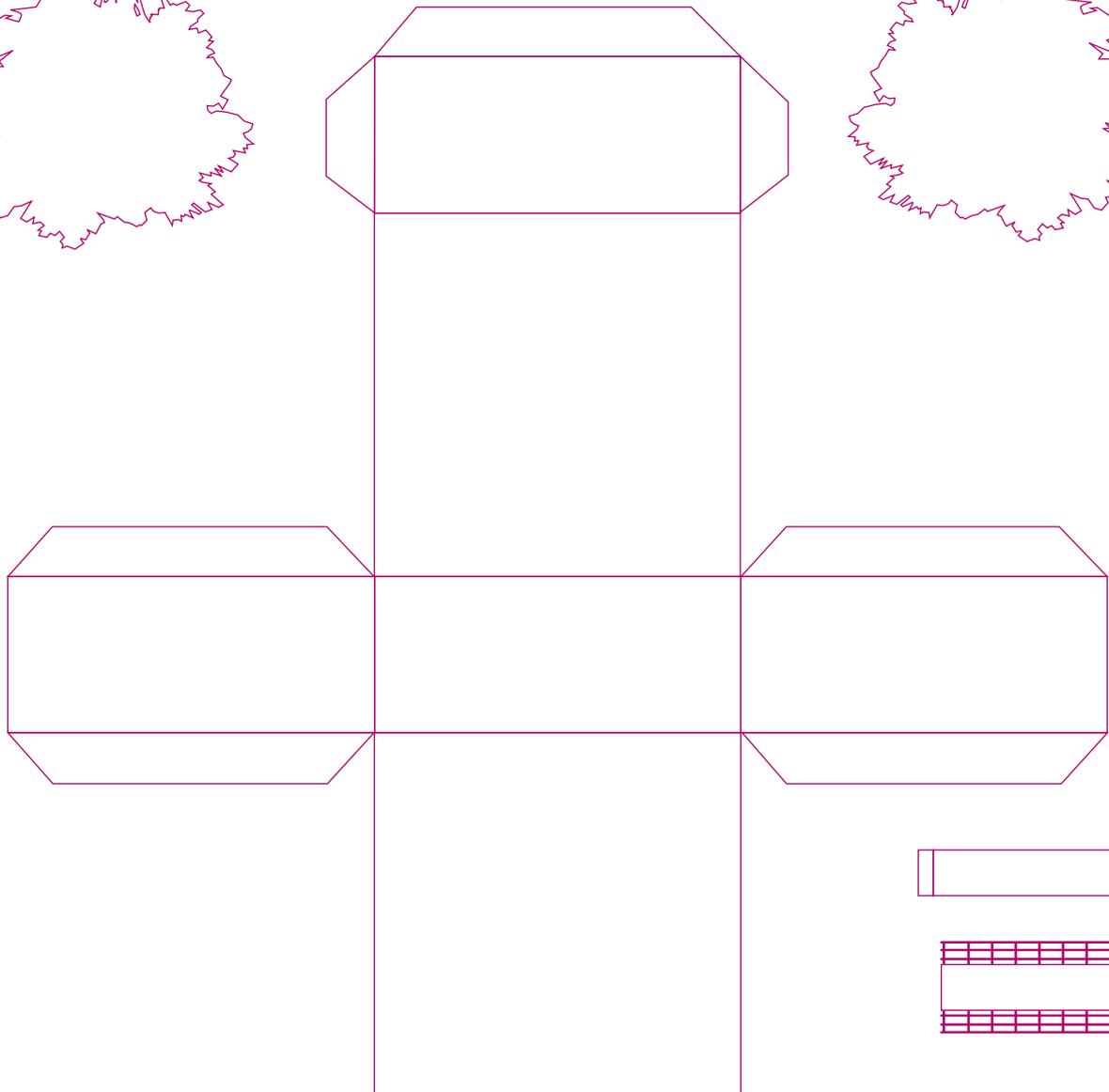
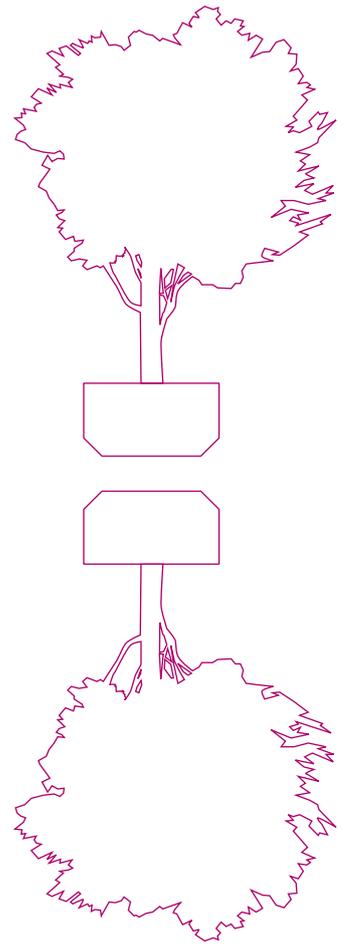
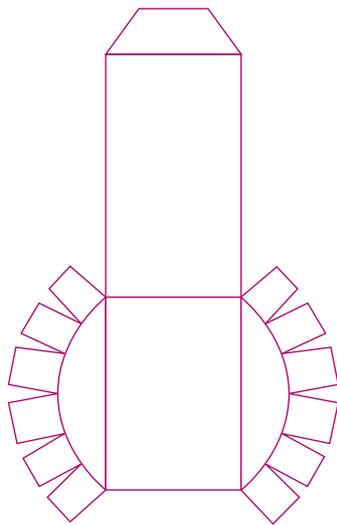
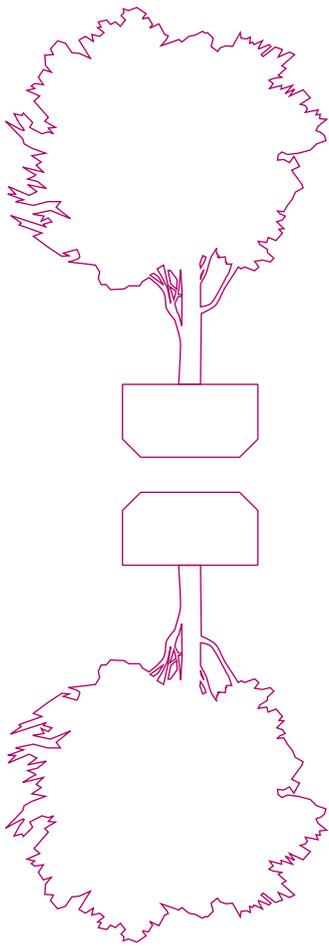
バックナンバー・年間購読をご希望の方は  
ご連絡ください。

TEL  0466-49-3437  
FAX  0466-49-3594  
MAIL  [gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

年間購読料は手数料を含め、合計1,800円です。  
年間を通じて購読されますと200円の割引となります。  
発行回数は年4回(1,4,7,10月)を予定しています。

make your campus  
12 ε (エプシロン) 館







**KEIO SFC REVIEW No.22**

**湘南藤沢学会 2004.07.15**